

群馬県前橋市

宮田遺跡

1996

宮田遺跡調査会

群馬県前橋市

宮田遺跡

1996

宮田遺跡調査会

序

前橋市東部の利根川左岸の地域は、数多くの遺跡が存在しており、群馬県の原始・古代を考える上で非常に重要な地域です。この度、この地に道路清掃車両の車庫が建設されることになりましたが、その予定地が弥生時代の集落跡として知られる宮田遺跡の一角であるため、当調査会が埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

その結果、奈良・平安時代を中心とした竪穴住居14軒など、多くの遺構を発見いたしました。ここにその調査報告書を刊行する運びとなりましたが、この成果が広く活用され地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業を経て報告書の刊行に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました群馬県土木部道路維持課、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、山武考古学研究所、そして、発掘・整理の作業にあたられた多くのみなさんに厚く御礼申し上げ、序といたします。

平成8年3月

宮田遺跡調査会

会長 林 弘二

例　　言

1. 本書は、道路清掃車両車庫等施設建設に伴う宮田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市富田町587-1・588-1他に所在する。
3. 事前の群馬県教育委員会による試掘調査から、古墳時代から平安時代にかけての遺構所在が判明したため、施設建設予定地である1,260m²の面積において本調査を実施した。本調査の実施期間は平成7年4月17日から同年5月31日までを要した。
4. 発掘調査は群馬県土木部・前橋市教育委員会・群馬県教育委員会の三者から組織された宮田遺跡調査会が調査主体となり、実際の調査は山武考古学研究所に委託された。
5. 本書の執筆・編集は群馬県教育委員会及び前橋市教育委員会の指導のもとに山武考古学研究所が実施した。執筆の分担は以下の通りである。
I……………齊藤和之（群馬県教育委員会文化財保護課）
II～VI……………武部喜光（山武考古学研究所所員）
また、整理及び報告書作成で石井照子・岡田うめ・中平雪子・萩原真理子・矢島博文・矢島房江の協力を得た。
6. 発掘調査に係わる図面・写真などの記録資料及び出土遺物のすべては前橋市教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまでに、下記の諸氏及び諸機関に御協力を賜り、記して感謝の意を表す次第です。
松本義行（地権者）・群馬県立前橋東高等学校及び同校地理歴史研究部（顧問　米澤育夫）
群馬県土木部道路維持課

凡　　例

1. 第1図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」、第2図は前橋市都市計画課発行の1万分の1原形図「6の3」、第3図は前橋市都市計画課発行の2,500分の1原形図「24番」をそれぞれ使用した。
2. 遺構跡図中に使用した方位は座標北を示す。また土層図及び断面図の横に記した数値は海拔標高である。
3. 住居跡説明文中の規模は住居跡掘り込み下端幅の数値である。出土個体総数は細片でも一個体と認められた場合は点数として勘定した。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は次の通りである。
遺構：住居跡・土坑・井戸跡・掘立柱建物跡………1/60、カマド………1/30、溝状遺構………1/80
遺物：土器・石器………1/3・1/4
5. 宮田遺跡の略称は6E-33である。また、各遺構の略称は次の通りである。
1号住居跡→H-1、1号掘立柱建物跡→B-1、1号土坑→D-1
1号井戸跡→I-1、1号焼土跡→F-1、1号構状遺構→W-1
1号道路跡→R-1

目 次

序

例 言・凡例

I. 調査に至る経緯と組織	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の経過と方法	4
IV. 遺跡の概要と基本土層	4
V. 遺構と遺物	
1. 壺穴式住居跡	6
2. 掘立柱建物跡	24
3. 土坑	24
4. 井戸跡	26
5. 焼土跡	26
6. 道路跡	26
7. 溝状遺構	26
8. 表土採集遺物	31
VI. 結 語	31
抄 錄	

挿 図 目 次

第1図 宮田遺跡と周辺の遺跡位置図	2
第2図 宮田遺跡の位置図（1）	3
第3図 宮田遺跡の位置図（2）	3
第4図 宮田遺跡全体実測図	折り込み
第5図 基本堆積土層図	5
第6図 1号住居跡とその遺物実測図	6
第7図 2号住居跡実測図	7
第8図 2号住居跡カマドとその遺物実測図	8
第9図 2号住居跡の遺物実測図	9
第10図 3号住居跡とその遺物実測図	10
第11図 4号住居跡とその遺物実測図	12
第12図 5号住居跡とその遺物実測図	13
第13図 6号住居跡とその遺物実測図	14
第14図 7号住居跡とその遺物実測図	15
第15図 8号住居跡実測図	16
第16図 8号住居跡とその遺物実測図（1）	17
第17図 8号住居跡の遺物実測図（2）	18
第18図 9号住居跡とその遺物実測図	19
第19図 10号住居跡とその遺物実測図（1）	20
第20図 10号住居跡の遺物実測図（2）	21
第21図 10号住居跡の遺物実測図（3）	22
第22図 11・14号住居跡とその遺物実測図	23
第23図 12号住居跡とその遺物実測図	24
第24図 13号住居跡とその遺物実測図	25
第25図 1号掘立柱建物跡とその遺物実測図	27
第26図 土坑実測図	28
第27図 土坑実測図と23・26土坑遺物実測図	29
第28図 井戸跡・焼土跡・道路跡実測図	30
第29図 1・2号溝状遺構実測図	31
第30図 表土採集遺物実測図	32

表 目 次

表1～表4 遺物観察表（1）～遺物観察表（4）	33～36
-------------------------	-------

図版目次

- 図版1－1. 遺跡全景（上方から）
2. 遺跡北側近景（南から）
3. 遺跡北側土坑群（南から）
- 図版2－1. 1号住居跡遺物出土全景（西から）
2. 1号住居跡カマド煙道部断面
3. 2号住居跡遺物出土全景（西から）
4. 2号住居跡カマドB（南から）
- 図版3－1. 4号住居跡全景（西から）
2. 4号住居跡カマド断面（南から）
3. 4号住居跡遺物（12）出土近景
4. 5号住居跡遺物出土全景（東から）
- 図版4－1. 7号住居跡遺物出土全景（東から）
2. 7号住居跡掘り方全景（西から）
3. 8号住居跡遺物出土全景（西から）
4. 8号住居跡掘り方内遺物（17）出土近景（北から）
- 図版5－1. 9号住居跡掘り方全景（西から）
2. 10号住居跡遺物出土全景（南から）
3. 10号住居跡遺物出土近景
4. 10号住居跡掘り方全景（北から）
- 図版6－1. 1号掘立柱建物跡柱痕確認全景（東から）
2. 1号掘立柱建物跡完掘全景（北から）
3～10. 1号掘立柱建物跡
柱穴（P-1～P-8）断面
- 図版7－1. 12号土坑全景（南から）
2. 13号土坑全景（南から）
3. 16号土坑全景（南から）
4. 17号土坑全景（南東から）
- 図版8－1. 28号土坑全景（西から）
2. 29号土坑全景（北から）
3. 1号井戸遺物出土（北東から）
4. 2号井戸掘削断面（西から）
- 図版9. 1・2号住居跡出土遺物
- 図版11. 7～9号住居跡出土遺物
- 図版13. 10～14号住居跡出土遺物
- 図版14. 1号掘立柱建物跡、23・26号土坑、1号井戸、表土採集遺物
4. 標準堆積土層断面
5. 噴砂痕跡（13号住居跡覆土上面）
5. 2号住居跡カマドA（西から）
6. 2号住居跡床面下掘り方（西から）
7. 3号住居跡遺物出土全景（西から）
8. 3号住居跡カマド（西から）
5. 6号住居跡全景（西から）
6. 6号住居跡カマド近景（西から）
7. 6号住居跡土層断面（北から）
8. 6号住居跡掘り方全景（西から）
5. 8号住居跡掘り方全景（西から）
6. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から）
7. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から）
8. 9号住居跡遺物出土全景（西から）
5. 11号住居跡遺物出土全景（西から）
6. 12号住居跡遺物出土全景（西から）
7. 13号住居跡遺物出土全景（西から）
8. 11・14号住居跡遺物出土全景（西から）
11. 5号土坑全景（南から）
12. 7号土坑全景（東から）
13. 9号土坑全景（東から）
14. 11号土坑全景（西から）
5. 21号土坑全景（東から）
6. 22号土坑全景（南から）
7. 24号土坑全景（東から）
8. 26号土坑遺物出土全景（南から）
5. 2号井戸全景（西から）
6. 道路跡（西から）
7. 1号溝全景（西から）
8. 2号溝全景（西から）
- 図版10. 3～6号住居跡出土遺物
- 図版12. 9・10号住居跡出土遺物

I 調査に至る経緯と組織

1. 調査に至る経緯

群馬県教育委員会文化財保護課では、群馬県関係機関が実施する開発事業について、平素より各課・各機関へ文書・パンフレットを送付したり定期的な打ち合わせを行い、また土地利用調整などの合議を通じて開発計画の把握につとめ、必要な対応をしようとしている。

平成6年11月、群馬県土木部道路維持課より県教育委員会文化財保護課へ、道路清掃車両庫等建設候補地における埋蔵文化財の所在の有無についての照会があった。これに対し文化財保護課は、当該地は周知の遺跡内であるため、建設工事に先立って試掘調査等の対応が必要であると回答した。

平成7年3月、県文化財保護課によって試掘調査が行われた。その結果、建設工事予定地内から奈良・平安時代の堅穴住居等が確認され、これらの遺構に掘削が及ぶ場合や構造物が建設される場合には、事前の発掘調査が必要であると判断された。

その後、この試掘結果を受けて道路維持課・前橋市教育委員会と協議を行ったが、事業変更は困難との判断にいたり、恒久構造物や沈砂池が建設される1,260m²について発掘調査を実施することとした。本調査については、群馬県教育委員会に事務局を置く調査会を組織し、実施することになった。

なお、出土資料及び関連記録については、前橋市教育委員会で保管・活用する予定である。

2. 調査の組織

宮田遺跡調査会組織表

区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部参事兼文化財保護課長	荒畠 大治
理事	群馬県土木部 道路維持課長 群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 次長 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	金田 俊 轟 公之 本山 卓
監事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 専門員 前橋市教育委員会事務局文化財保護課 埋蔵文化財係長	井川 達雄 駒倉 秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	巾 隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 指導主事 同 上 主任	高井 佳弘 飯塚 聰

発掘調査参加者

大河原初枝・黒沢とき・齊藤吉江・桜井れい・鶴岡清作・神宮政江・鈴木宏・高橋トク子・田中米一・
田村きみ・田村さよ子・田村よし・土屋ケサミ・長岡裕治・中野つる・中野利一・山田隆・吉田とみ子・
吉田新一郎・吉田芳江・渡辺武江・勒使河原西造

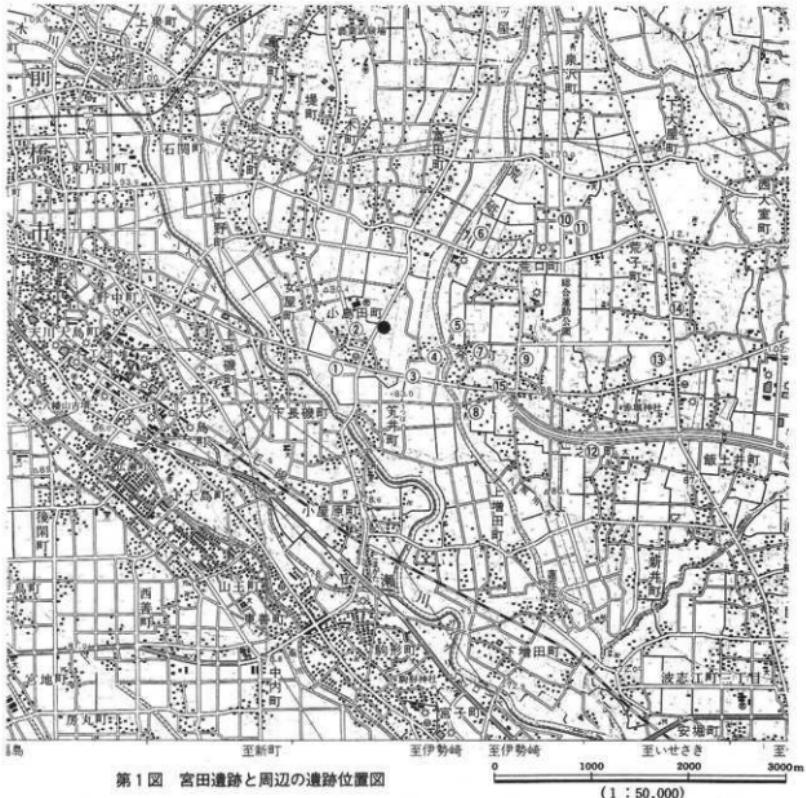
群馬県立前橋東高等学校地理歴史研究部(顧問 米澤育夫)

高橋麻衣・高橋和江・星由香利・千木良奈央・山田由紀恵・太田好紀・阿久沢佳之・荒井啓子・和佐香・
後藤亜季・北爪雅恵・新井麻衣・吉田容子・川崎美由紀・竹内智彦・熊川利津子

II 遺跡の位置と環境

宮田遺跡は、前橋市街地から東へ8kmに位置し、赤城山南麓の末端部にあたる。周囲は赤城山麓から流下する荒砥川や宮川などによって台地とそれを樹枝状に刻む沖積低地とで形成された扇状地となっている。本遺跡は荒砥川西岸の沖積低地に立地し、水田や畑地として利用されていた。こうした周辺の沖積低地や台地上には数多くの遺跡の存在が知られている。

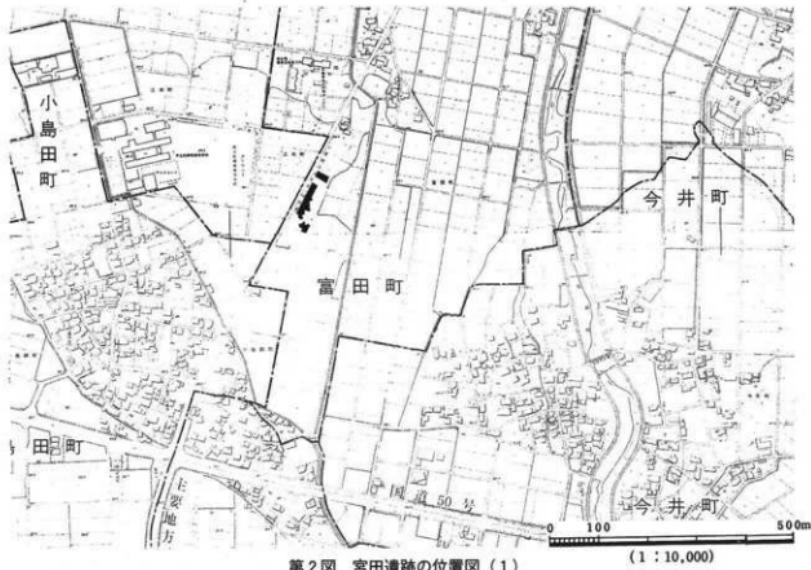
先土器時代の遺跡では荒砥北三木堂遺跡⑦・柳久保遺跡群⑩が知られている。縄文時代の遺跡は多く、なかでも前期後半と中期後半の遺跡は数多く確認されている。牛伏遺跡で、草創期の爪形文土器、荒砥北三木堂遺跡⑦で早期の撚糸文土器が出土している。縄文時代の集落は、前期の荒砥宮田遺跡⑥・柳久保遺跡群⑩



第1図 宮田遺跡と周辺の遺跡位置図

(1 : 50,000)

- 宮田遺跡 ①筑井八日市遺跡 ②小島田八日市遺跡 ③今井白山遺跡 ④今井城 ⑤荒砥北原遺跡 ⑥荒砥宮田遺跡 ⑦荒砥北三木堂遺跡 ⑧今井神社古墳 ⑨荒砥大日塚遺跡 ⑩柳久保遺跡群 ⑪柳久保水田遺跡 ⑫荒砥天之宮遺跡 ⑬荒砥上ノ坊遺跡 ⑭荒砥荒子遺跡 ⑮今井道上遺跡



第2図 宮田遺跡の位置図(1)



第3図 宮田遺跡の位置図(2)

荒砥上ノ坊遺跡③、中期から後期では荒砥北三木堂遺跡⑦などが知られている。

弥生時代の遺跡は中期後半から後期の集落が荒砥北三木堂遺跡⑦・⑧荒砥大日塚遺跡⑨・荒砥上ノ坊遺跡⑩が知られている。

古墳時代の遺跡は、前期の集落と方形周溝墓が荒砥上ノ坊遺跡⑪・荒砥鳥原遺跡、中期の集落が柳久保遺跡群⑫で発見されている。後期の集落は荒砥大日塚遺跡⑬・荒砥天之宮遺跡⑭・居館跡が荒砥荒子遺跡⑮・今井道上遺跡⑯が知られている。また、古墳は大型の前方後円墳である今井神社古墳⑰が知られている。

奈良・平安時代の遺跡は集落が筑井八日市遺跡①・今井白山遺跡③・荒砥北原遺跡⑥などが知られている。また、浅間B軽石によって埋没した水田跡が柳久保水田遺跡⑪などが知られている。

III 調査の経過と方法

1. 調査の経過（平成7年4月17日～同年5月30日）

4/17から重機による表土剥ぎを開始した。4/19から調査区内の遺構確認作業を実施し、竪穴式住居跡14軒、掘立柱建物跡1棟、土坑29基、溝2条、道路跡1条、井戸跡2基を確認した。また、調査区内に公共座標に沿った10m方眼の基準杭設定及び水準移動を実施した。4/20から時期的に新しい掘り込みとみらる道路跡と土坑から調査を着手した。竪穴式住居跡の調査は4/21から調査を着手した。

5/8から1号掘立柱建物跡の調査に着手した。1号掘立柱建物跡は桁行2間・梁行2間の規模で、柱痕跡も確認できた。5/22までに遺構調査のはとんどを終了した。その結果、調査区内の所々に地震によるとみられる液状化現象の跡（噴砂）が確認された。5/24から5/26にかけて遺跡全景の空中撮影と遺跡全体撮影を実施した。5/25から竪穴式住居跡の床面下調査を実施した。5/26に発掘機材撤出及びプレハブ撤去を実施し、5/31の残土埋め戻し作業の終了を以て全ての現場作業を終了した。

2. 調査の方法

表土剥ぎは試掘調査の結果をもとに、重機によって遺構確認面まで表土除去を実施した。遺構の調査は土層観察用の畦を設定し、堆積状況の観察をしながら掘り下げた。調査区内の基準杭は公共座標に沿った10m四方のグリッドを設定した。遺構実測の作成は1/20縮尺を基準とし、住居内カマドは1/10縮尺、溝は1/40縮尺、遺構全体図は1/200縮尺で行った。遺構の写真撮影は調査の進行状況に応じて、白黒35mm・カラースライド35mm・白黒6×7mmのフィルムで記録した。

IV 遺跡の概要と基本土層

調査の結果、奈良・平安時代の集落跡を主体とした遺構と遺物が検出された。検出された遺構は、竪穴式住居跡が14軒、掘立柱建物跡が1棟、土坑が29基、井戸跡が2基、溝状遺構が2条、道路跡が1条である。竪穴式住居跡は、その出土遺物から7世紀前半から9世紀後半にかけてそれぞれ営まれたものと考えられる。最も古い時期は2号住居跡である。2号住居跡は一辺が7mの大形住居で、廃絶時のカマドは東壁に付設されていたが、それ以前に使用されていたとみられるカマドが北壁に検出された。その次の時期にあたるのが8・13号住居で、8世紀前半から半ばにかけて営まれていたと考えられる。5・6・7号住居は8世紀後半から9世紀前半にかけて営まれていたと考えられる。1・4・9・10・11・12・14号住居は9世紀半ばから



第4図 宮田遺跡 全体測量図

後半にかけて営まれていたと考えられる。竪穴式住居跡は、カマドを東壁に付設する場合が多く、北壁に確認できたのは2・11号住居だけであった。いずれも構築材にスサを混入した灰色粘土を使用しているが、芯材にやや違いがみられた。2号住居は甕をII形に組み合わせ、7・8・10号住居は安山岩の切り石を使用している。竪穴式住居跡の、床面下の調査の結果、3・6・7・8・9・10号住居で箱形やすり鉢形に掘り込まれた土坑が確認された。なかでも8号住居は床面から70~80cmの深さに掘り込まれた箱形の土坑がいくつも重なりあっていった。掘立柱建物跡は1棟検出され、出土遺物などから平安時代前半に営まれたものと考えられる。1号掘立柱建物跡は桁行2間・梁行2間の柱痕も確認できた。

2条の溝状遺構はいずれも東西方向に直線的に走行しており、いずれも底面に水酸化鉄が沈着しており、灌漑用に使った水路とみられる。使用時期は不明であるが、遺構との切り合いから中世以降のものと考えられる。

道路跡は重複関係や掘り込み面などにより近世から近代にかけてのものと考えられる。

土坑は近世から近代にかけての耕作に伴う桶埋設土坑が大半である。

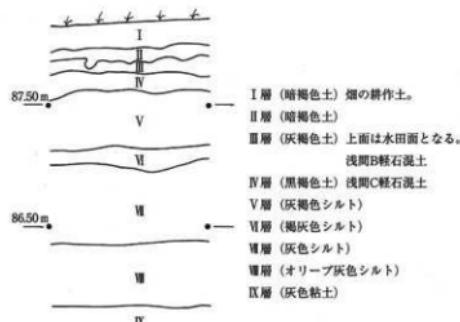
井戸跡はいずれも深さ2mの砂礫層まで掘り抜かれている。1号井戸跡は中世、2号井戸跡は近代以降のものとみられる。

出土遺物は竪穴式住居跡から出土した土師器（甕・壺）と須恵器（甕・壺・蓋）が主体で、他に灰釉陶器壺・石製鍛錬車・鉄製刀子である。また、遺構は検出されなかったが、縄文時代前期の諸磯式や後期の称名寺I式に比定される深鉢が採集されている。

基本堆積土層

調査区は荒砥川の沖積低地に立地し、水田や畠として利用されている。今回の調査区も畠地で、調査区北側の現地表面の標高は約88.40mで南東に向かって約1°の下り勾配である。調査区内の堆積土層に差はみられず奈良・平安時代の遺構は右図のIV層上面で確認できた。また、右図は調査区南西側で作図したものである。

本遺跡の調査区全域にわたって地震に伴うとみられる液状化現象の痕跡が噴砂（にぶい黄橙色細砂）として確認された。噴砂は浅間C



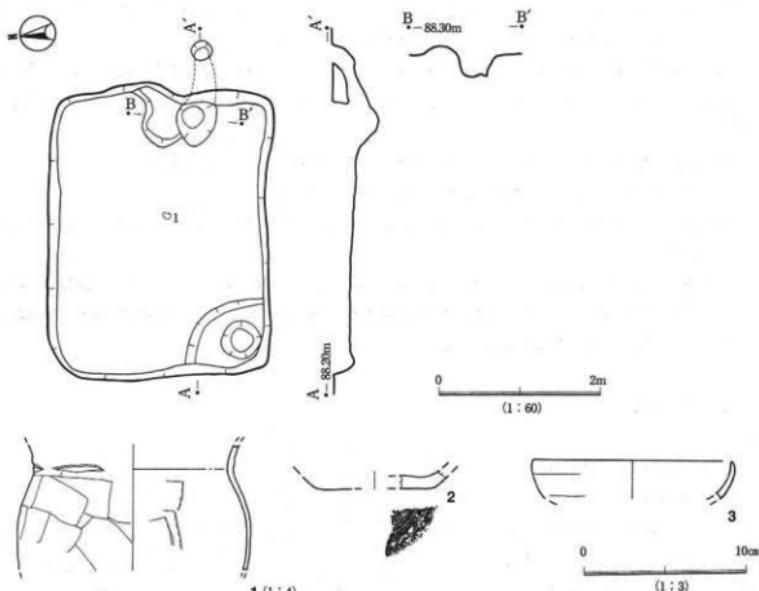
第5図 基本堆積土層図

軽石混土層であるIV層を突き抜け、浅間B軽石層である層には達していない。また、8世紀代以前の竪穴住居跡覆土に確認され、9世紀代以降の竪穴住居跡覆土には確認されない。赤城山南麓一帯の遺跡調査で噴砂や地割れが報告されており、本遺跡の噴砂痕も「類聚国史」に記述されている弘仁九年（818年）に起きた大地震に起因する可能性がある。

V 遺構と遺物

1. 穫穴式住居跡

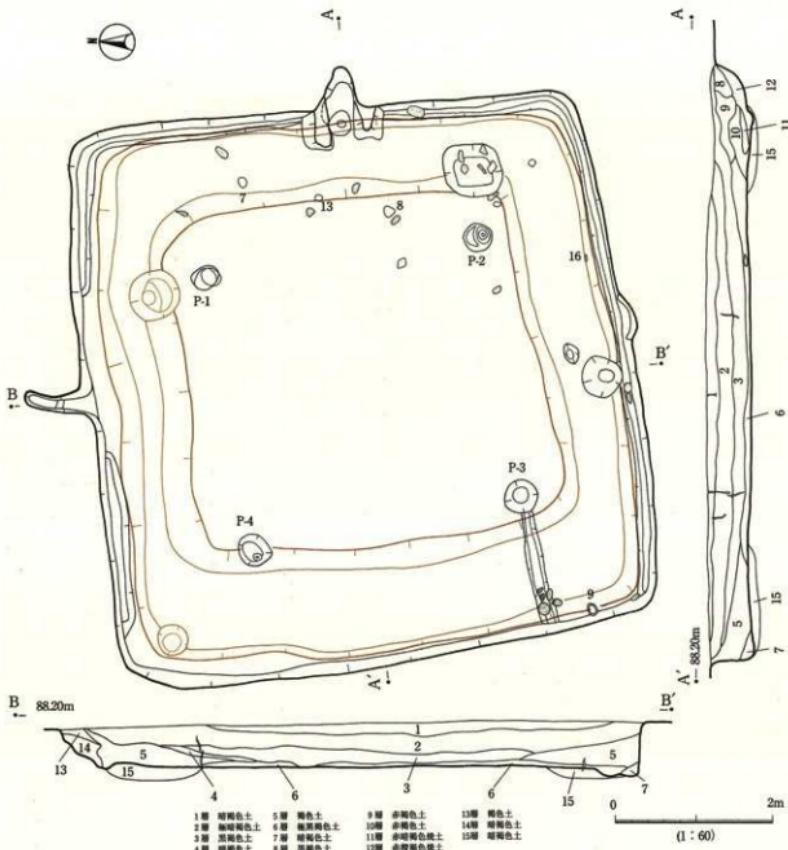
14軒の竪穴式住居跡が検出された。造営時期は古墳時代後期の7世紀前半から平安時代中期の9世紀後半までである。



第6図 1号住居跡とその遺物実測図

1号住居跡 (第6図、表1、図版2-1・2、図版9)

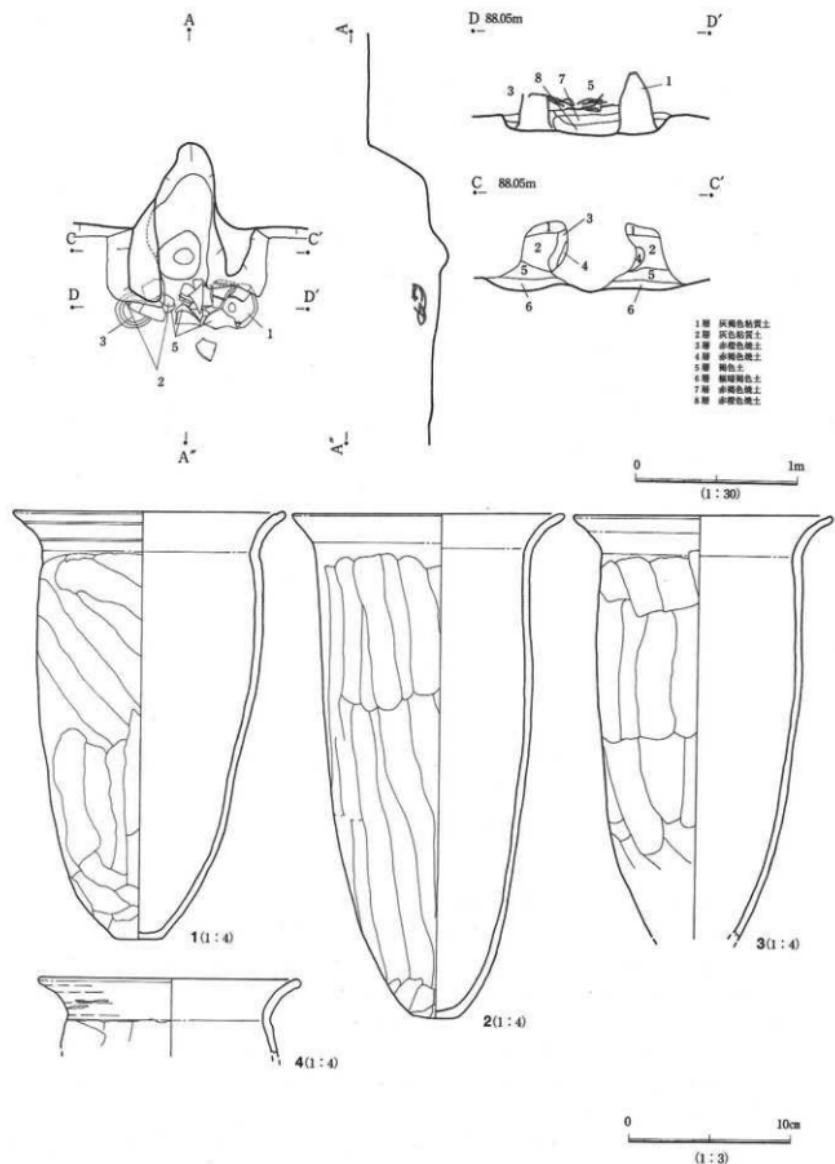
位置／調査区北隅E-12・F-12グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.50m×南北辺2.54m。残存壁高／28~34cm。主軸方位／N-99°-E。床面積／8.75m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて若干軟弱ながら踏み固めが認められた。床面標高は87.90mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、煙道部は地山を掘り抜き壁外に細長く突出している。火床面は深さ32cmのピット状の穴を黒褐色土で埋め戻した上面に設けられ、僅かな被熱痕がみられた。柱穴／南北隅角で深さ34cmの穴が検出された。整溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は8点と僅少で、土師器の壺が2点・坏が4点、須恵器の坏が2点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。1(土師器壺)は住居中央部から出土。2・3は埋没土中からの出土。



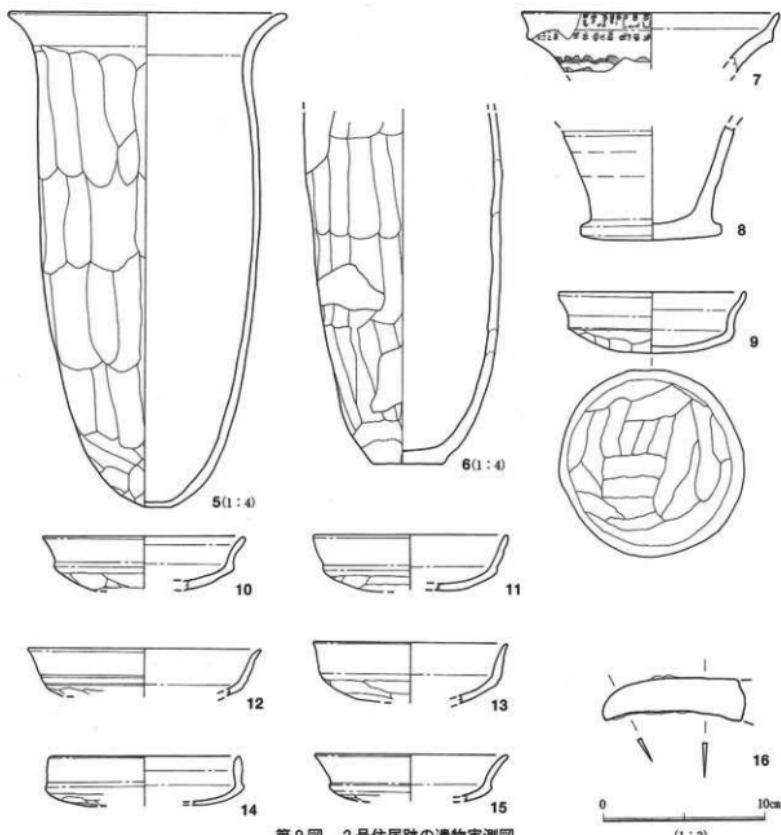
第7図 2号住居跡実測図

2号住居跡 (第7~9図、表1、図版2~3~6、図版9)

位置／調査区北側F-12-G-12グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺6.70m×南北辺6.50m。残存壁高／50~54cm。主軸方位／N-83°-E。床面積／87.5m²。床面／灰色シルトであるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて顕著な踏み固めが認められた。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積で、土層断面に埴砂痕が観察された。貯蔵穴／南東隅角に70cm×63cmで深さ45cmの箱形に掘り込まれている。カマド／北壁中央と東壁中央に付設されている。本跡廃絶時には北壁のカマドは壊されて壁となっており、東壁のカマドだけが使用されていたとみられる。東壁のカマドは焚口の袖と天井に構築材の芯として1~6の長胴窓をII形に組み合わせている。柱穴／主柱穴が対角線上に4穴検出され、各柱穴の深さはP-1が41cm、P-2が40cm、P-3が45cm、P-4が38cmである。壁溝／西壁



第8図 2号住居跡カマドとその遺物実測図

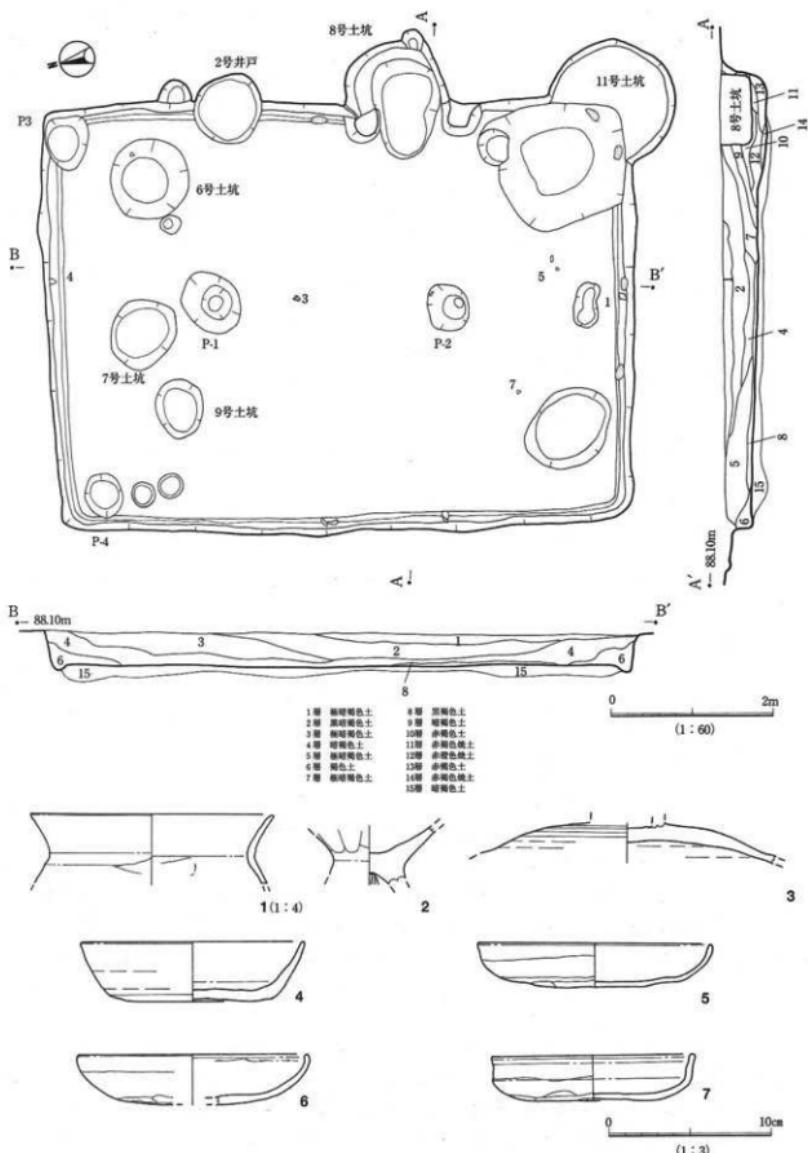


第9図 2号住居跡の遺物実測図

とカマド下を除いて廻る。間仕切り溝／断面U字形で幅14cm～20cm、深さ10cm、長さ135cmで西壁から柱穴P-3まで直線的にのびる。掘り方／茶色で図示したように四方に帯状に掘り込まれている。遺物出土状態／出土個体数は38点で、土師器の壺6点・瓶1点・坏2点・高坏1点・須恵器の壺2点・瓶2点・鉢1点・坏3点である。カマド構築材に二次利用された長胴壺以外は遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

3号住居跡 (第10図、表1・2、図版2-7・8、図版10)

位置／調査区中央D-8・9グリッド。遺存状態／2号井戸、6～9・11号土坑に切られているが状態は概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺5.20m×南北辺7.18m。残存壁高／40～45cm。主軸方位／N-102°-E。床面積／36.9m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前



第10図 3号住居跡とその遺物実測図

から本跡中央部にかけて顯著な踏み固めが認められた。床面標高は87.50mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。貯蔵穴／南東隅角に155cm×148cmで深さ45cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに付設され、上部は8号土坑に棲されている。両側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。火床面は床面レベルより8cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。柱穴／合計7穴検出され、各柱穴の深さはP-1が48cm、P-2が52cm、P-3が35cm、P-4が38cm、他の3穴は深さ20cm前後である。壁溝／全周する。掘り方／本跡全域にわたり8~20cmの深さでは均一に掘り込まれている。遺物出土状態／出土個体数は35点で、土師器の壺が3点・台付き壺が1点・壺が17点、須恵器の壺が2点・瓶が1点・壺が9点・蓋が2点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

4号住居跡 (第11図、表2、図版3-1~3、図版10)

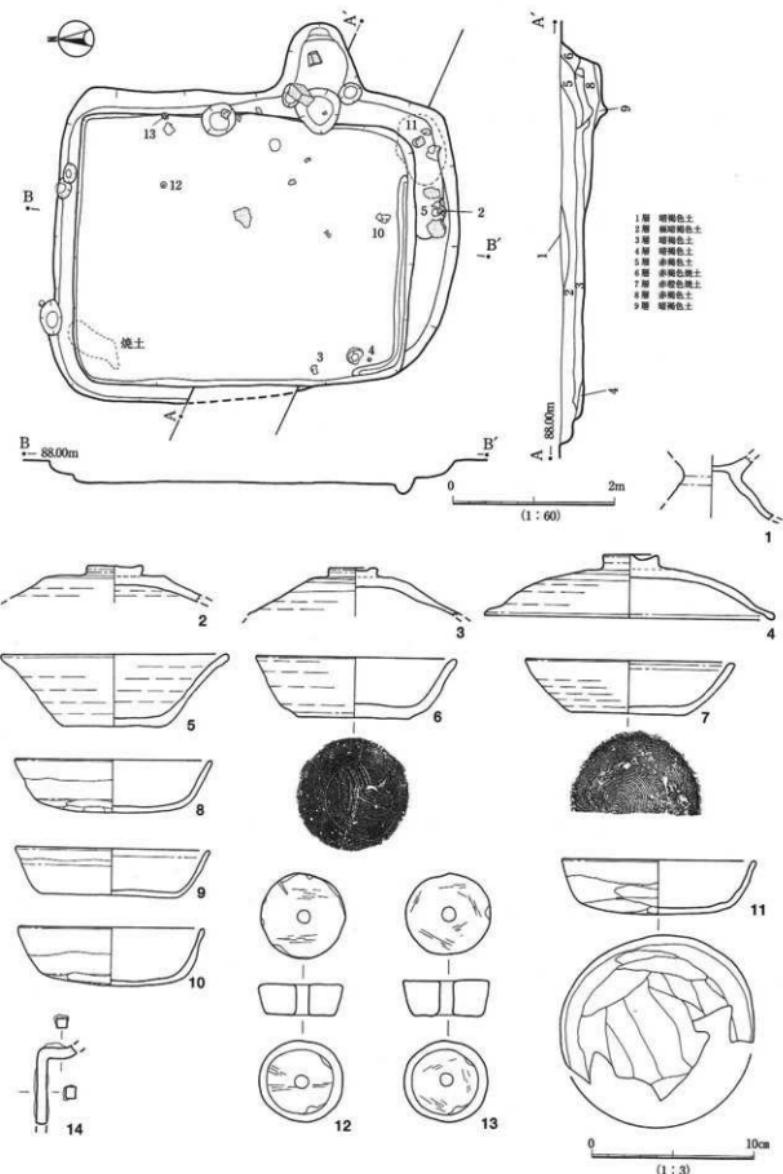
位置／調査区中央D-8グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.75m×南北辺4.90m。残存壁高／26~32cm。主軸方位／N-90°-E。床面積／14.3m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。床面標高は87.70mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。北西隅角と南東隅角の床面直上で厚さ2cmの焼土堆積を確認。棚状造構／北と南の壁際で床面より10cm程一段高く設けられている。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、燃焼部内とカマド前で角柱状に削った安山岩の切り石が出土。構築材の芯に使ったとみられる。遺物出土状態／出土個体数は45点で、土師器の壺が3点・台付き壺が2点・壺が15点、須恵器の壺が2点・瓶が1点・壺が13点・蓋が6点、石製紡錘車が2点、鉄製品が1点である。南側の棚状造構と南西隅角に遺物の集中がみられる。

5号住居跡 (第12図、表2、図版3-4、図版10)

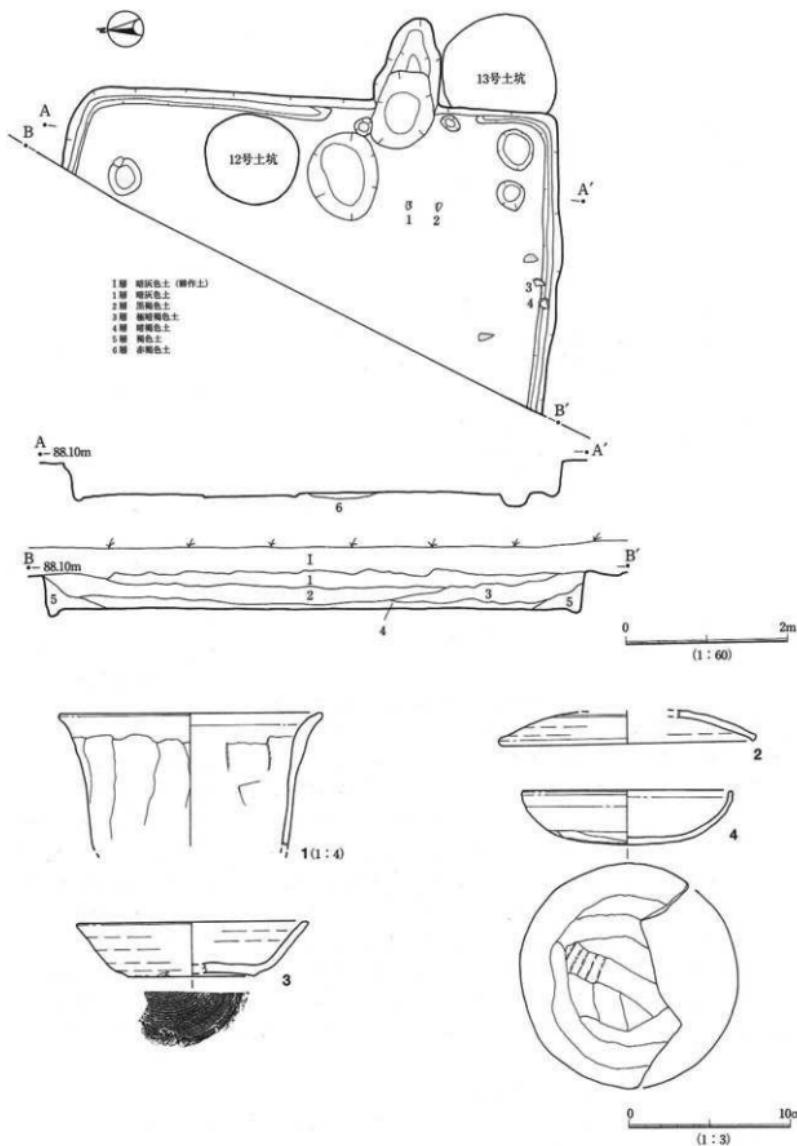
位置／調査区中央C-7・8グリッド。西側は調査区域外となっており、本跡の約1/2の調査となった。遺存状態／12・13号土坑に切られているが、概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺-×南北辺6.10m。残存壁高／42~45cm。主軸方位／N-99°-E。床面積／-。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて顯著な踏み固めが認められた。床面標高は87.60mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。柱穴／北東隅角と南東隅角に合計3穴を確認し、いずれも15~20cmと浅い。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより8cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。構築材は完全に崩壊流失しているが、袖部対になる深さ20cmの杭穴を確認。また、カマド前に深さ8cmの皿状の掘り込みを確認。中に焼土と灰が充填されており、カマドの灰焼き穴とみられる。遺物出土状態／出土個体数は15点と僅少で、土師器壺が2点・台付き壺が1点・壺が5点、須恵器壺が4点・蓋が3点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

6号住居跡 (第13図、表2、図版3-5~8、図版10)

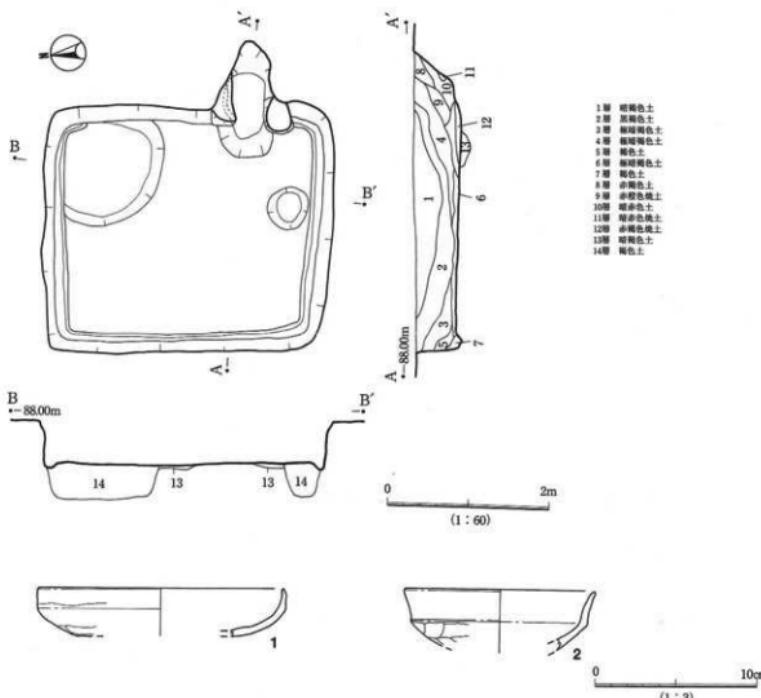
位置／調査区中央D-7グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺2.70m×南北辺3.90m。残存壁高／50~54cm。主軸方位／N-94°-E。床面積／10.5m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。埋没状態／土層断面に埴砂痕が観察された。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより6cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。両側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。壁溝／東壁際を除いて廻る。掘り方／深さ3~6cmの浅い掘り込みが所々みられる。床下土坑／北東隅角に箱形と南壁際に柱穴状の土坑を確認。遺物出土状態／出土個体数は18点と僅少で、いずれも細片である。土師器壺が4点・壺が14点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。



第11図 4号住居跡とその遺物実測図



第12図 5号住居跡とその遺物実測図



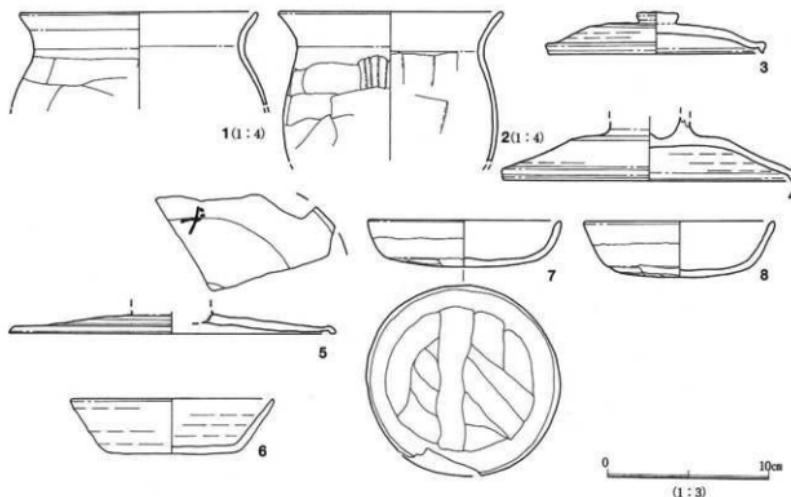
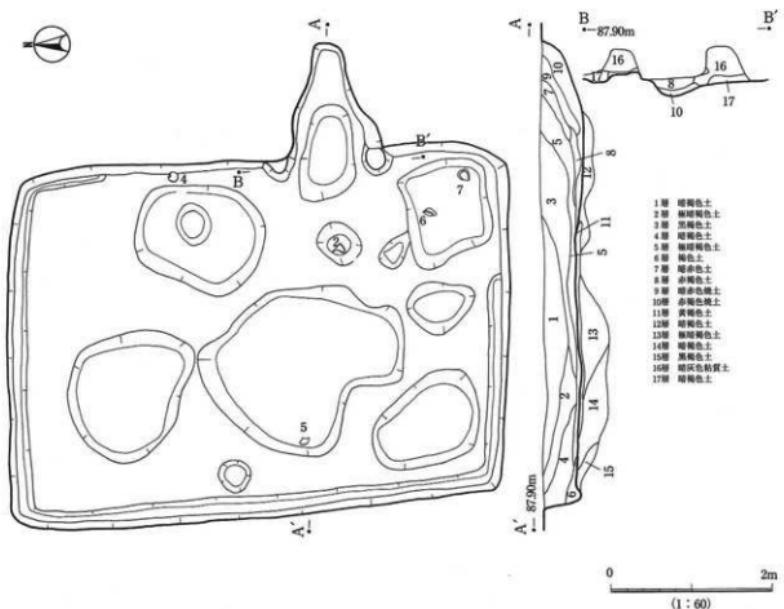
第13図 6号住居跡とその遺物実測図

7号住居跡 (第14図、表2・3、図版4-1・2、図版11)

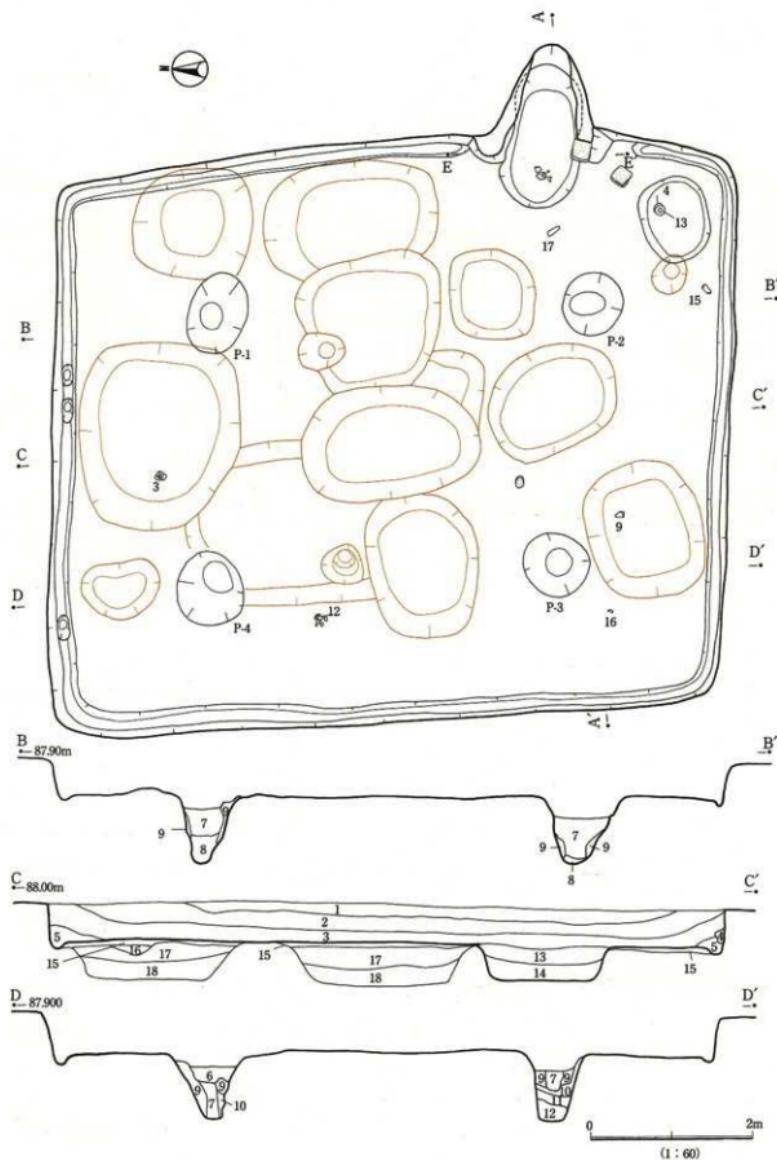
位置／調査区中央C-6・D-6グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺4.30m×南北辺6.15m。残存壁高／44~50cm。主軸方位／N-91°-E。床面積／26.33m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、若干凹凸のある面になっている。貯蔵穴／南東隅角に115cm×105cmで深さ52cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより6cm低く設けられ、被熱痕が明瞭である。僅かであるが両側の袖が遺存し、構築材は暗灰色粘土質である。壁溝／東壁際を除いて廻る。掘り方／深さ6~15cmの浅い掘り込みがカマド下からその周辺にかけてみられる。床下土坑／平面形が方形や梢円形で壁の立ち上がりが緩やかな皿状の土坑が6基確認された。深さはいずれも35~40cmで、埋没土に焼土塊と細かい炭を2~3%含む。柱穴／カマド前と西壁際に2穴確認され、深さはいずれも15~20cmと浅い。遺物出土状態／出土個体数は39点で、土器類の甕が4点、台付き甕が2点、壺が13点、須恵器の甕が2点、壺が11点、蓋が6点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

8号住居跡 (第15~17図、表3、図版4-3~7、図版11)

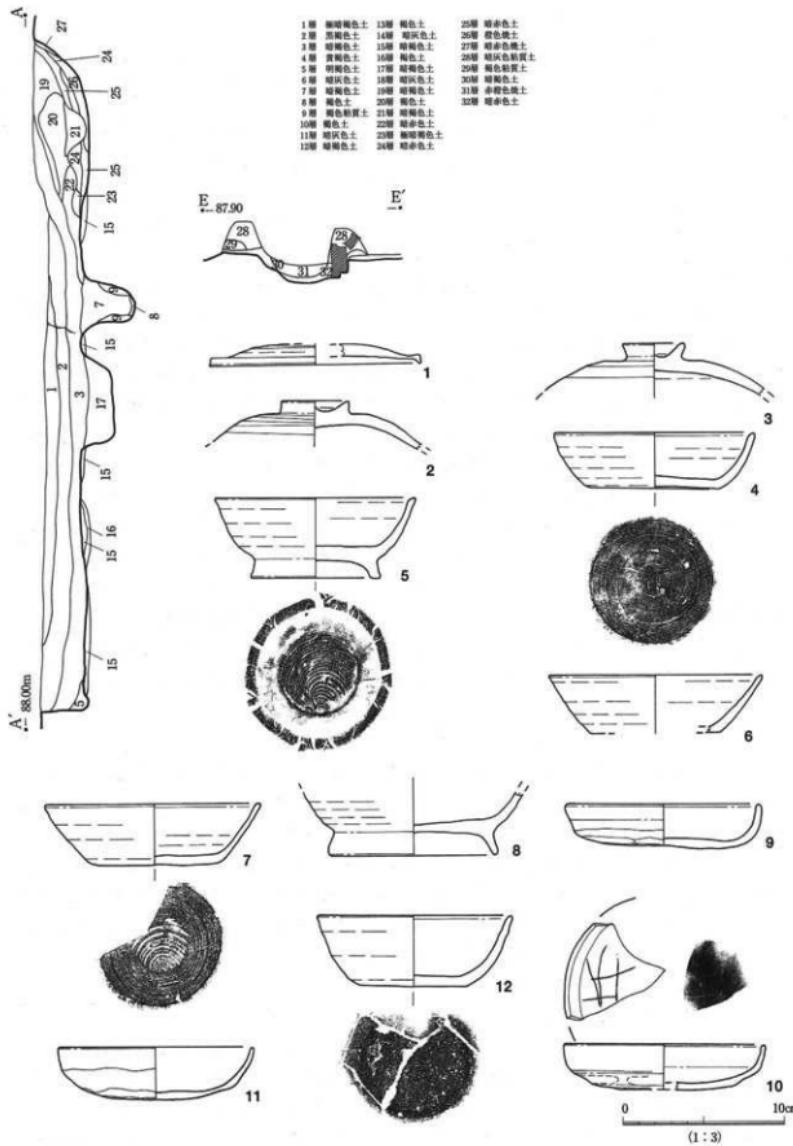
位置／調査区中央C-5・6グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺7.15m×南北辺



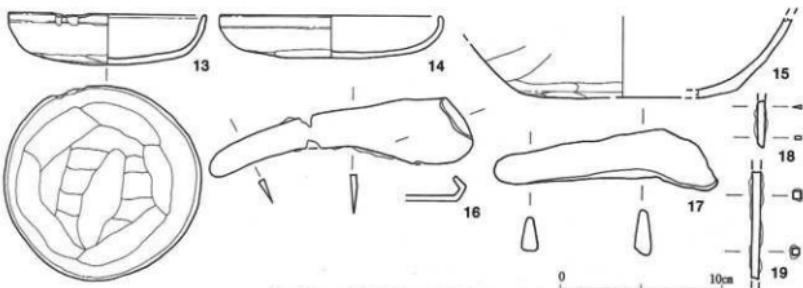
第14図 7号住居跡とその遺物実測図



第15図 8号住居跡実測図



第16図 8号住居跡とその遺物実測図(1)



第17図 8号住居跡の遺物実測図(2)

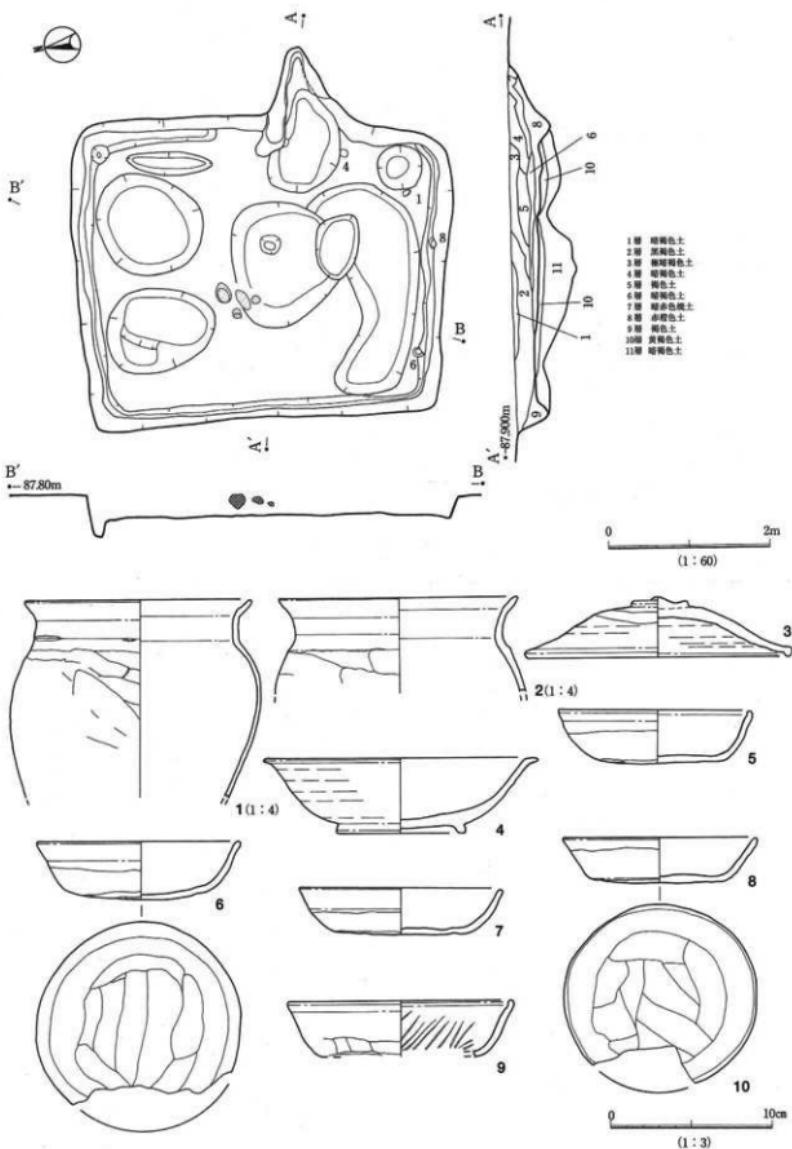
8.35m。残存壁高／40～45cm。主軸方位／N-85°-E。床面積／59.5m²。床面／平坦面である。埋没状態／土層断面に埴砂痕あり。貯藏穴／南東隅角に105cm×80cmで深さ48cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに付設され、火床面は床面レベルより10cm程低く設けられ、被熱痕が明瞭である。両側の袖が遺存し、構築材は暗灰色粘質土である。袖の芯に角柱状の安山岩切り石を使い、袖内壁は被熱痕が明瞭でレンガ状である。柱穴／主柱穴が対角線上に4穴検出され、各柱穴の深さはP-1が78cm、P-2が82cm、P-3が86cm、P-4が80cmである。柱穴埋土に褐色粘質土を用い、柱痕も確認できた。また床下土坑として扱った柱穴状の掘り込みが各主柱穴の南側に確認され、主柱穴の据え替えも想起できる。壁溝／カマド下を除いて全周する。床下土坑／茶色で図示したように箱形の土坑が床面下に11基確認され、その重複関係から少なくとも3期に分かれた掘り込み時期があるとみられる。また、柱穴P-2とP-3の間に位置する土坑は上面に貼床が施されていないことから、本跡廃絶時に使用されていた可能性が伺える。他の土坑はいずれも埋没土に焼土塊や細かい炭・灰色シルト塊を含むなど一気に埋め戻した状態が伺える。遺物出土状態／出土個体数は59点で、土師器の壺5点・台付き壺2点・瓶1点・鉢1点・壺19点、須恵器の壺4点・壺16点・蓋8点、鉄製品が4点である。貯藏穴内から壺2点が重なって出土。カマド前の掘り方内から鋤先が出土。

9号住居跡 (第18図、表3・4、図版4-8・図版5-1、図版11・12)

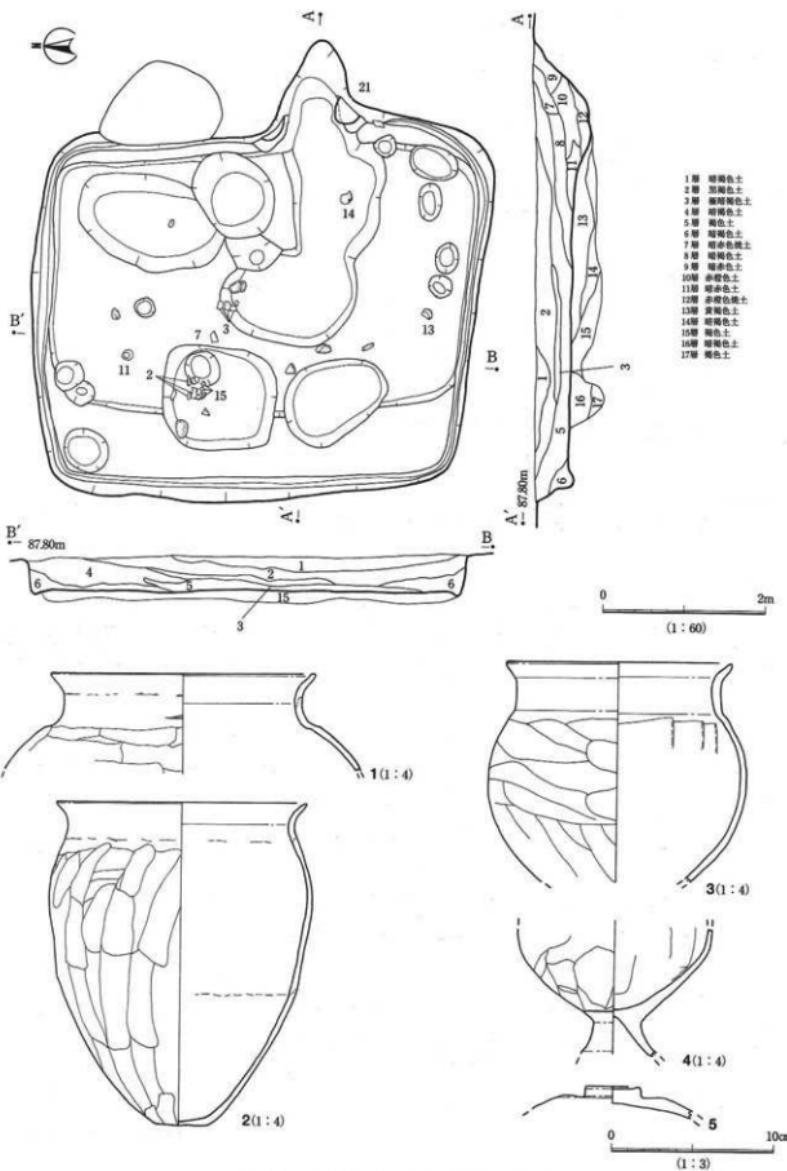
位置／調査区中央C-5グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.50m×南北辺4.30m。残存壁高／22～31cm。主軸方位／N-98°-E。床面積／15.0m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、若干凹凸のある面になっている。貯藏穴／南東隅角に55cm×50cmで深さ50cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに付設され、火床面は床面レベルより13cm程低く設けられている。北側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。壁溝／全周する。床下土坑／椭円形や不整形な様々な形態の土坑が5基検出された。遺物出土状態／出土個体数は36点で、土師器の壺が4点・台付き壺が3点・壺が14点、須恵器の壺が3点・壺が7点・蓋が4点、灰釉陶器の壺が1点である。中央に川原石4個出土。

10号住居跡 (第19～21図、表4・5、図版5-2～4、図版12・13)

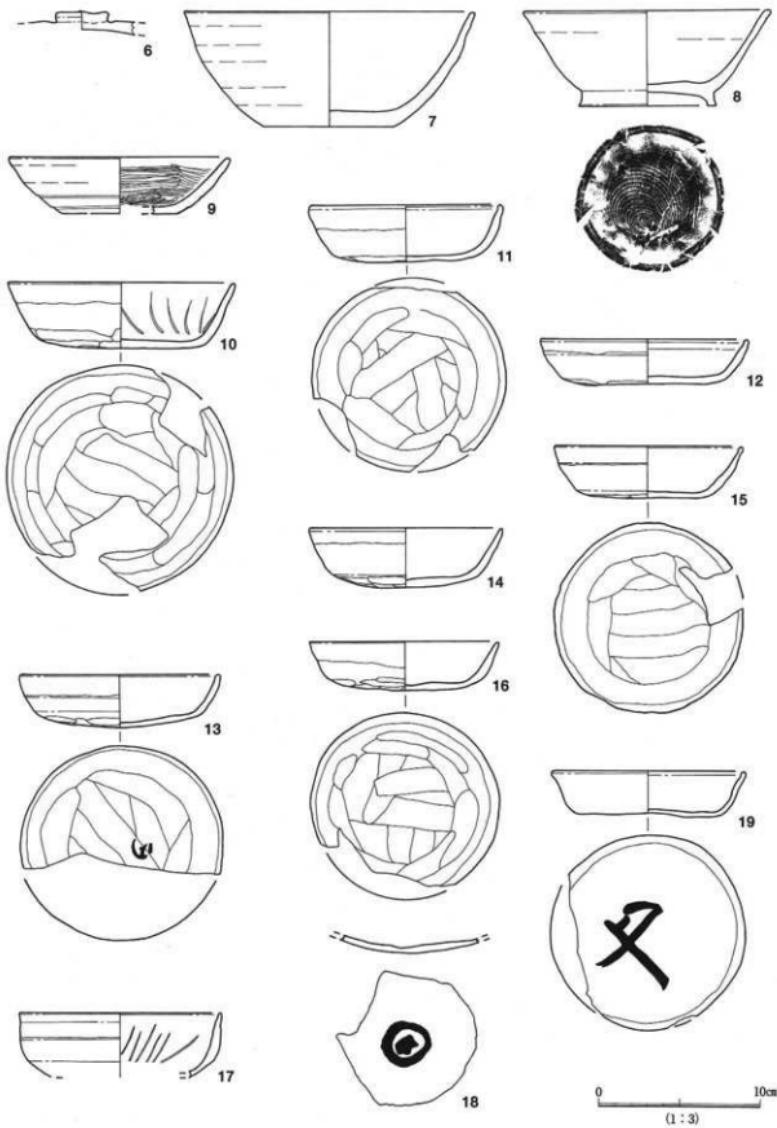
位置／調査区中央B-3グリッド。遺存状態／27～29号土坑に切られているが、概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺4.30m×南北辺5.40m。残存壁高／40～45cm。主軸方位／N-89°-E。床面積／23.1m²。床面／床面標高は87.20mで平坦である。埋没状態／床面上から埋没土にかけて本跡全域に焼土や炭を確認したが、上屋を想起できるような明瞭な残り方ではなかった。また、土層断面の4・5層はシルト塊やロー



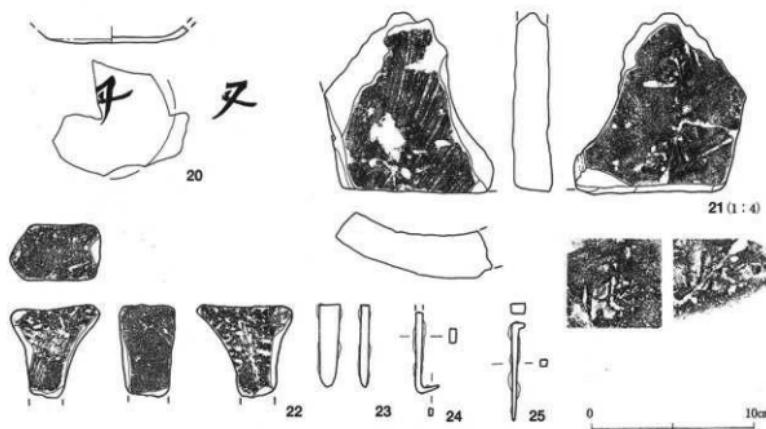
第18図 9号住居跡とその遺物実測図



第19図 10号住居跡とその遺物実測図 (1)



第20図 10号住居跡の遺物実測図（2）



第21図 10号住居跡の遺物実測図(3)

ム塊を多く含み一気に埋め戻した状態が伺える。カマド／褐色粘質土を構築材とする両袖が僅かではあるが遺存する。火床面は、床面レベル8cm低く設けられ被熱痕明瞭。壁溝／全周する。掘り方／本跡東側3/4に深さ25~37cmの堅穴状の掘り込み。床下土坑／箱形やすり鉢形で深さ44~53cmの土坑が5基検出され、いずれもの掘り方を切って掘り込まれている。遺物出土状態／本跡が火災焼失という原因からか出土個体数は71点と多く、土師器の壺が5点・台付き壺が4点・瓶が1点・壺が29点・須恵器の壺が3点・鉢が1点・壺が13点・蓋が9点・瓦が2点・石殻が1点・鉄製品が3点である。本跡中央部に集中がみられる。

11号住居跡 (第22図、表5、図版5-5、図版13)

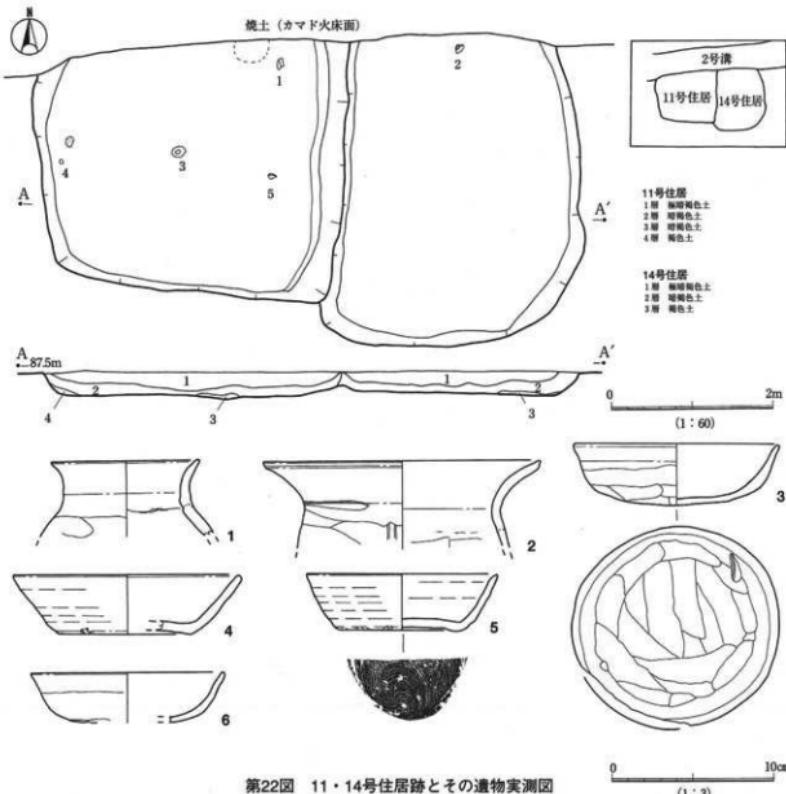
位置／調査区南側B-1グリッド。重複状態／東側で14号住居跡を切り、北側を2号溝に切られている。平面形／方形。規模／東西辺3.35m×南北辺3+a m。残存壁高／30~34cm。主軸方位／N-89°-E。床面積／~m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。床面標高は87.20mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。カマド／東壁中央やや南寄りに付設され、2号溝に切られて被熱痕の残る火床面だけが確認できた。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は17点で、いずれも埋没土からの出土である。土師器の壺が2点・壺が6点・須恵器の壺が6点・蓋が3点である。

12号住居跡 (第23図、表5、図版5-6、図版13)

位置／調査区南側D-1グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.35m×南北辺4.20m。残存壁高／20~25cm。主軸方位／N-87°-E。床面積／14.0m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。柱穴／30~45cmの深さのものが3穴検出された。掘り方／ない。カマド／確認できなかった。遺物出土状態／出土個体数は14点と僅少で、いずれも埋没土からの出土である。土師器の壺が3点・壺が7点・須恵器の壺が3点・蓋が1点である。

13号住居跡 (第24図、表5、図版5-7、図版13)

位置／調査区中央D-5グリッド。重複状態／西側を僅かではあるが切られている。平面形／矩形。規模／東西辺5.15m×南北辺4.30m。残存壁高／12~24cm。主軸方位／N-93°-E。床面積／22.2m²。床面／ほぼ平

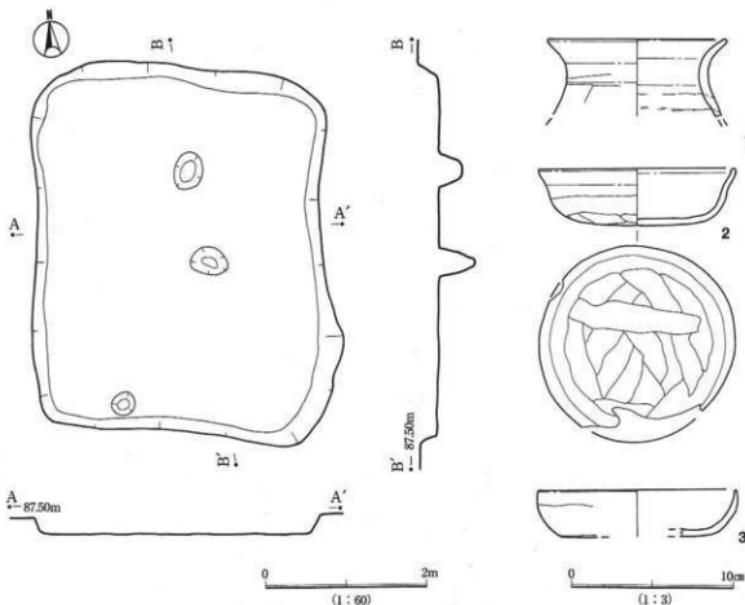


第22図 11・14号住居跡とその遺物実測図

坦な面になっており、全体に軟弱である。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。土層断面に埴砂痕が観察された。カマド／東壁中央に付設されている。東壁側が耕作によって削平されており、煙道部は確認できなかった。火床面は床面レベルより5cm程低く設けられ、被熱痕が明瞭である。袖は崩壊流失しており、明確にすることはできなかった。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は30点で、土器類の壺が4点・壺が9点・須恵器の壺が2点・瓶が1点・壺が9点・盤が1点・蓋が4点である。遺物は中央から南壁にかけて集中がみられる。

14号住居跡 (第22図、表5、図版5-8、図版13)

立地／調査区北側C-1グリッド。重複状態／北側と西側をそれぞれ2号溝と11号住居跡に切られている。平面形／矩形。規模／東西辺2.7+a m ×南北辺3.8+a m。残存壁高／25~31cm。主軸方位／N-89°-E。床面積／-m²。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。中央に部分的に踏み固めが認められた。カマド／確認できなかった。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は12点と僅少で、いずれも埋没土からの出土である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。



第23図 12号住居跡とその遺物実測図

2. 掘立柱建物跡

今回の調査で明確に掘立柱建物跡として捉えられたのは調査区中央南側の1号掘立柱建物跡1棟だけであったが、調査区中央北側のE-9グリッドに散在する柱穴状の掘り込み（ピット群）は建物跡を構成する可能性がある。

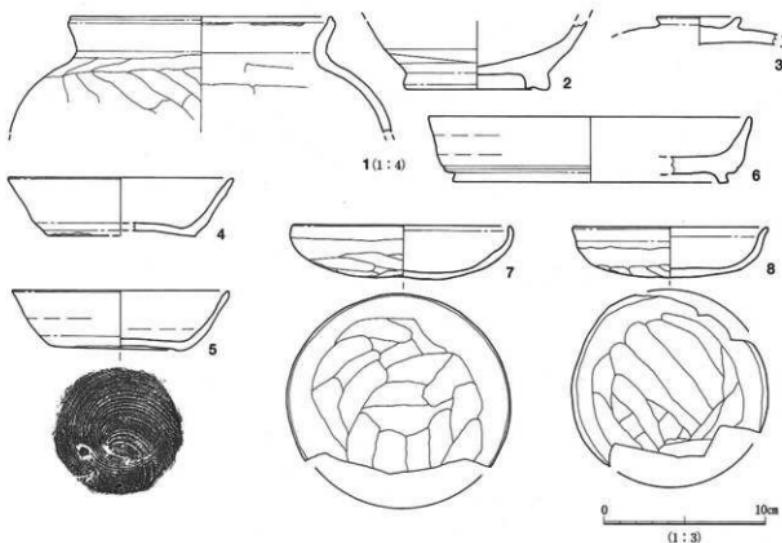
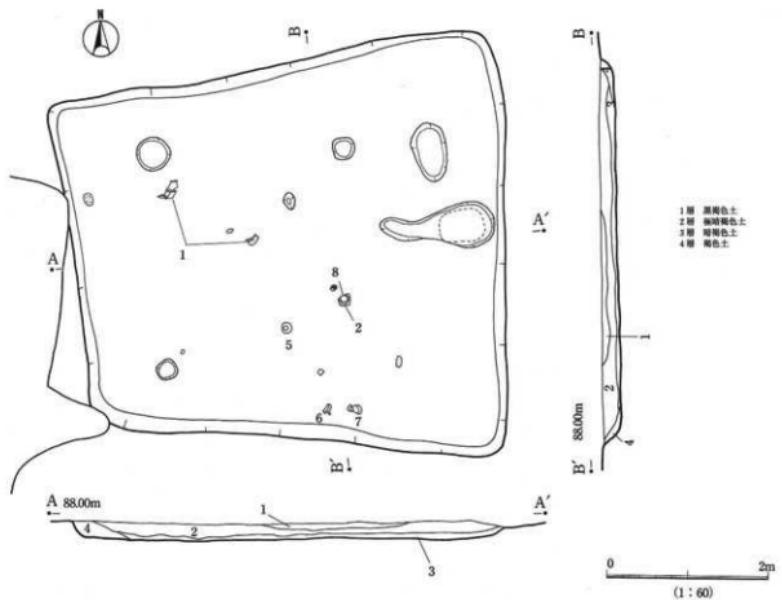
1号掘立柱建物跡（第25図、表6、図版6-1~10、図版14）

立地／調査区北側C-1グリッド。遺存状態／柱穴の掘り込みが深く、良好である。規模／2×2間、東西辺（桁行）4.85m×南北辺（梁行）4.85m。柱間は桁行長15尺で7尺半等間、梁行長15尺で7尺半等間。柱穴／径70~85cmの円形及び梢円形で、深さ55~70cmである。図中にスクリーントーンで示した部分が暗褐色土主体の柱痕である。1・2層は灰色粘土塊を含む埋込土である。桁行方位／N-87°-E。遺物出土状態／出土個体数は3点で、いずれも柱穴内からの出土である。1はP-3内、2はP-6内、3はP-7内からそれぞれ出土した。

3. 土坑（第26・27図、表6、図版6-11~14・図版7・図版8-1・図版14）

合計29基の土坑が検出された。そのうち平安時代に属するのは23・26~29号土坑である。他は出土遺物がなく、帰属年代は不明であるが大まかに近世以降の耕作に伴う穴とみられる。

23号土坑はD-9グリッドに位置し、長軸1.10cm×短軸52cm、深さ20cmの長楕円形で底面から図示した土師器杯（23土-1）が1点出土した。また、埋没土中に炭や焼土は検出されなかった。26号土坑はB-4グリッドに位置し、長軸1.72cm×短軸105cm、深さ25cmの長楕円形で底面はほぼ平坦である。底面に炭と灰混じりの焼土が厚さ5cmで堆積し、焼土中から図示した土師器杯2点（26土-1・26土-2）が出土した。



第24図 13号住居跡とその遺物実測図

骨片は確認できなかったが、本跡は火葬跡の可能性がある。28号土坑はB-3グリッドに位置し、10号住居跡を切っている。規模は長軸3.10m×短軸0.80m、深さ25cmの長楕円形で底面から炭混じりの薄い焼土層が確認され、土器器杯の細片が3点出土した。27・29号土坑は共にB-3グリッドに位置し、10号住居跡を切っている。底面から川原石が出土し、2基は建物跡を構成する柱穴の可能性もある。もし、建物跡と考えると柱間の芯々距離4.85m（15尺）になり、建物の大半は東側の調査区域外に位置するとみられる。

他の近世以降に帰属するとみられる土坑は、11号土坑のように円形で底面周縁が溝状に浅く窪みものと15号坑のように長方形で底面が平坦なもの2形態に分けられる。前者は桶を埋設したものとみられ、他に6・7・9・12~14・16・17が同形態である。後者は芋穴など耕作及び貯蔵用に掘られたものとみられ、他に2・3・18・21・22・24が同形態である。

4. 井戸跡

1号井戸跡（第28図、表6、図版8-3、図版14）

位置／調査区北側G-11・H-11グリッド。重複状態／道路跡に切られている。平面形／矩形。規模／長軸1.80m×短軸1.55m。残存壁高／2.25m。長軸方位／N-47°-E。形態／井戸側はみられず、調査状況では素掘りである。底面は平坦で透水層である砂礫層に設けられ、調査時でも湧水があった。壁面中位がオーバーハングしているのは埋没過程で崩壊したためとみられる。遺物出土状態／底面に大きな川原石が置かれていた。8層中から中世の所産とみられる図示した鉢1点（1号井戸-1）が出土した。

2号井戸跡（第28図、図版8-4、5）

位置／調査区中央D-9グリッド。重複状態／3号住居跡を切っている。平面形／ほぼ円形。規模／径0.85m。残存壁高／図化しなかったが、重機掘削による断ち割りで底面まで2.65mの深さを確認。形態／素掘りである。遺物はまったく出土しなかった。近代以降のものとみられる。

5. 焼土跡（第28図）

調査区中央C-4グリッドで焼土跡を3か所確認した。いずれも深さ10cm程の皿状の掘り込みに灰混じりの焼土が充填され、底面に明瞭な被熱痕を確認。遺物は出土せず、帰属年代は不明である。

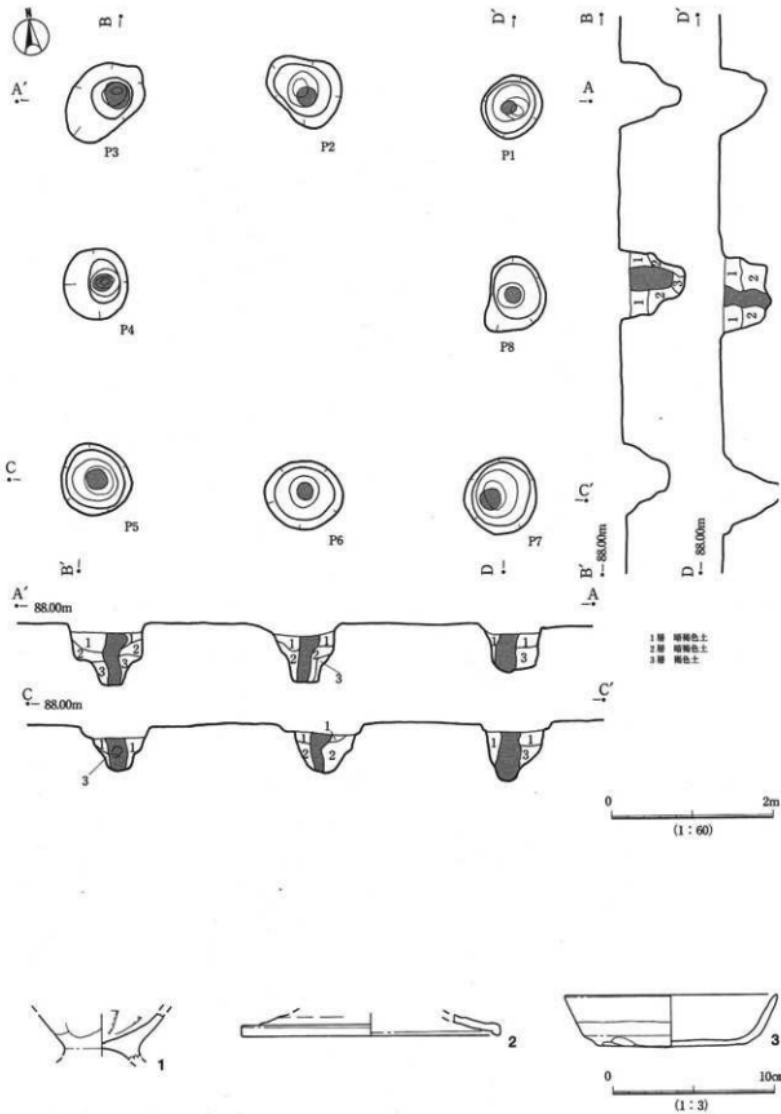
6. 道路跡（第28図、図版8-6）

位置／調査区北側G-11・H-11グリッド。重複状態／3号住居跡と1号井戸跡を切っている。規模／幅2.40m、深さ40cm。走行方位／N-140°-Eで走行し西側で北寄りにはほぼ直角に折れる。掘り方／わだち状に掘り込まれ、硬化面が2面確認された。帰属年代／遺物は出土しなかったが、本跡の掘り込み面と重複状態から近世以降のものとみられる。

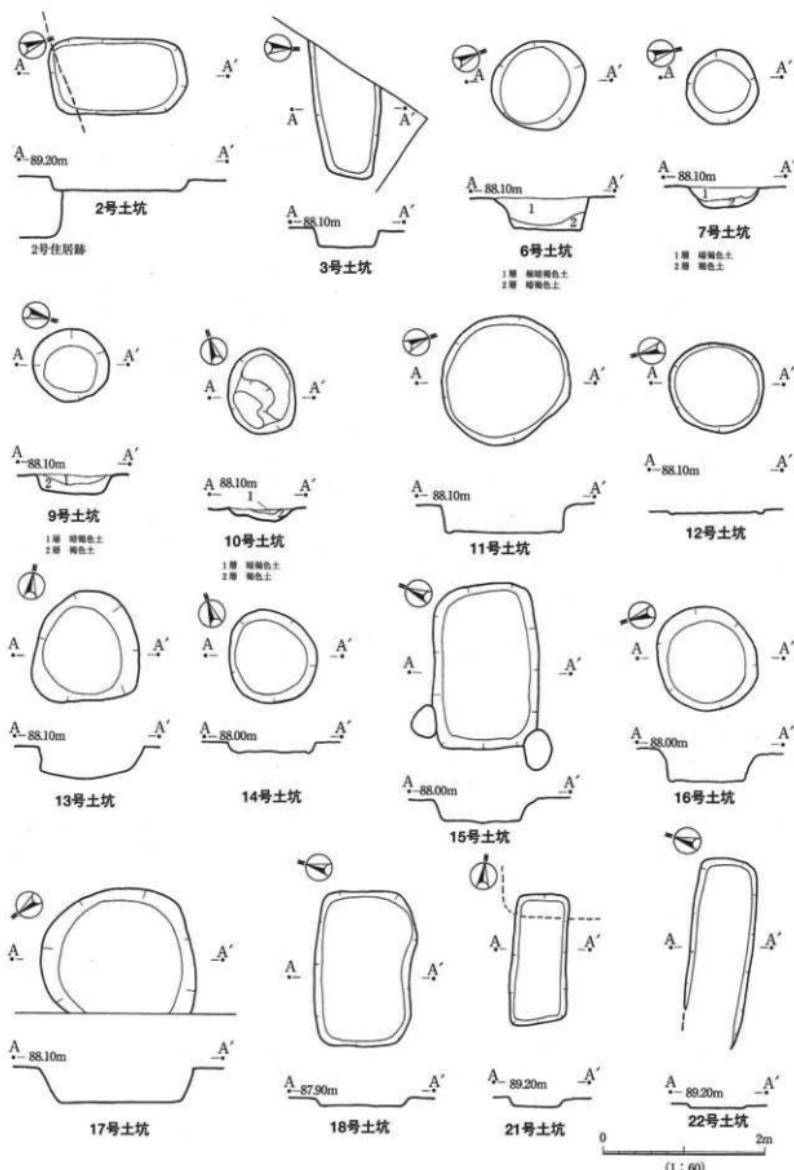
7. 溝状遺構

1号溝状遺構（第29図、図版8-7）

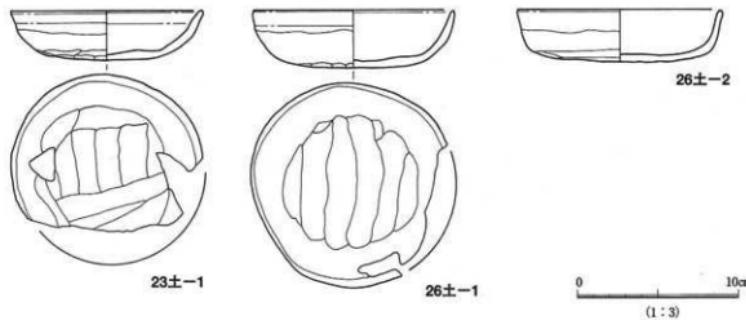
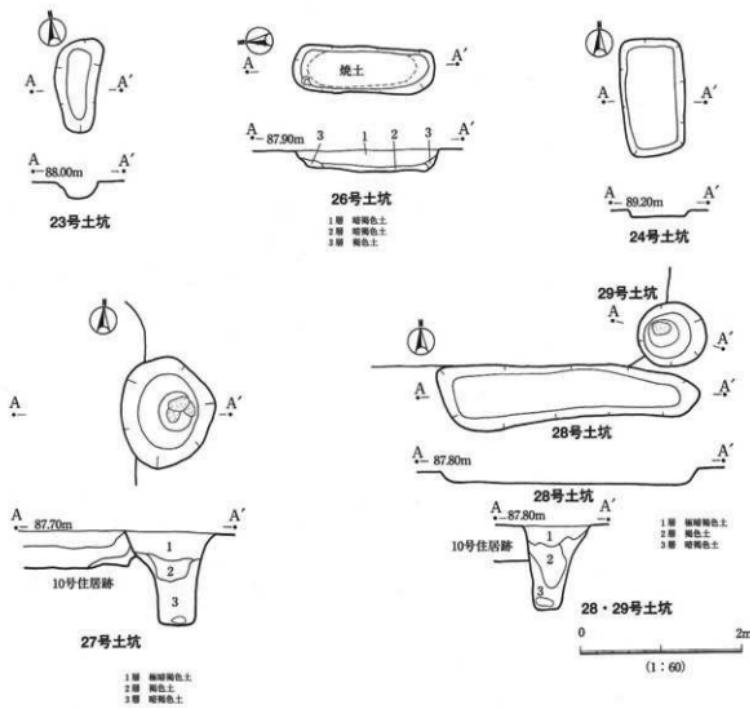
位置／調査区南側D-1グリッド。遺存状態／調査区の南東端に部分的に確認しただけで、本跡の大半は南側の調査区域外に延びる。走行方位／N-95°-Eで西から東へ直線的に走行するとみられる。用途／底面に川砂と酸化鉄の沈着が確認され、灌漑用とみられる。帰属年代／遺物は出土しなかったが、本跡の掘り込み面から中世以降のもとみられる。



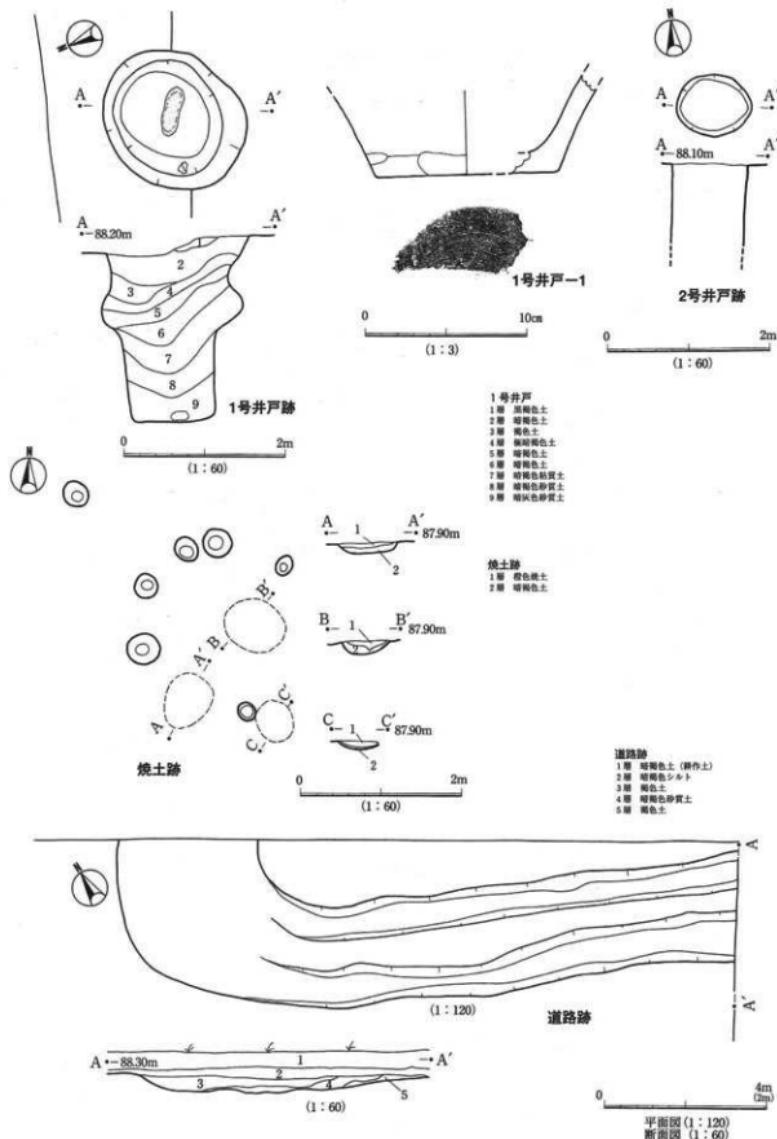
第25図 1号掘立柱建物跡とその遺物実測図



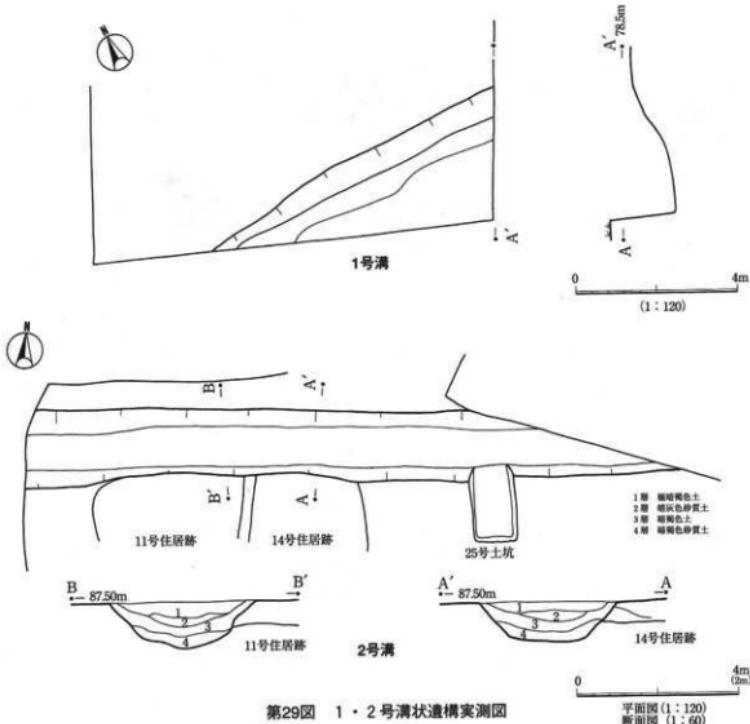
第26図 土坑実測図



第27図 土坑実測図と23・26土坑遺物実測図



第28図 1・2号井戸跡と焼土跡と道路跡及び1号井戸跡遺物実測図



第29図 1・2号溝状遺構実測図

2号溝状遺構 (第29図、図版8-8)

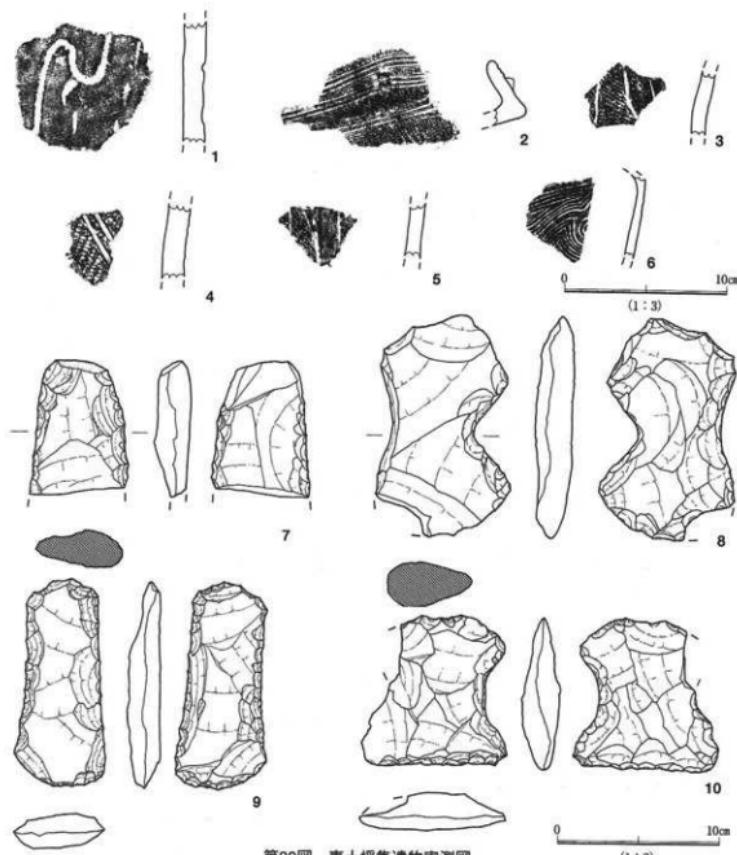
位置/調査区南側D-2-C-2グリッド。重複状態/11・14号住居跡を切り、25号土坑に切られている。断面/逆台形。規模/上端幅1.60m、下端幅0.80m、深さ45~55cm。走行方位/N-86°-Eで西から東へ直線的に走行。用途/埋没土の最下層である4層中に川砂が互層になって多量に混じっていることと底面に酸化鉄が沈着していることから灌漑用のものとみられる。底面は西から東へ約3°の緩やかな勾配で下る。帰属年代/遺物は出土しなかったが、重複状態から中世以降のものとみられる。

8. 表土探集遺物 (第30図、表6、図版14)

今回の調査で、表土中から採集されたり遺構埋没土中から出土しても時期的に伴わないとした遺物は総量で小型整理箱に1箱分である。縄文時代前期の諸磯b式・縄文時代後期の称名寺I式の深鉢形土器やそれに伴う石器がみられる。

VI 結 語

調査区内の所々に地震によるとみられる液状化現象の痕跡（噴砂）が確認された。この噴砂は埋没土中に



第30図 表土採集遺物実測図

観察できる竪穴住居跡と観察できない竪穴住居跡があり、その年代から『類聚国史』に「弘仁九年」(818年)七月、相模、武藏、下総、常陸、上野、下野等国、地震、山崩谷埋数里、圧死百姓不可勝計」という記述があり、本遺跡の墳砂痕もこの地震に起因するものと見られる。尚、本遺跡で埋没土中に墳砂痕が確認できたのは2・6・8・13号住居跡である。墳砂痕が確認できなかった住居跡も含めて、住居跡からの出土遺物と818年の墳砂痕との対比も興味深いところである。

参考引用文献

- 寒川 旭 「筑井八日市遺跡における地震の痕跡」『筑井八日市遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団(1994年)
- 内田憲治他 「赤城山南麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害－」群馬県新里村教育委員会(1991年)
- 坂口一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究第24号』群馬県史編纂委員会(1986年)

表1 遺物観察表(1)

遺物 番号	器種	器高×口径 ×底径(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
1 身分符跡	土師器 壺	- × - × -	胴部上半1/3	口縁はコの字に近い形状になるとみられる。胴部外側削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②焼成無化	中央 床面直上
	土師器 壺	- × - × 7.2	細片	底部は回転削り調整。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	土師器 壺	- × 12.4 × -	細片	底部外側削り調整。	①砂粒・角閃石 ②にふい粒③焼化	埋没土
	土師器 壺	38.2×22.5×3.4	完存	口縁部短く外反し、胴部外側斜及び底位 削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にふい粒③焼化	カマド構築材
	土師器 壺	41.9×22.6×4.0	ほぼ完存	口縁部短く外反し、胴部外側斜削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②浅黄粒③焼化	カマド構築材
	土師器 壺	- × 21.3 × -	底部欠損	口縁部短く外反し、胴部外側斜削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にふい粒③焼化	カマド構築材
	土師器 壺	- × 21.2 × -	口縁部1/3	口縁部短く外反し、胴部外側斜削り。	①砂粒・長石・石英 ②にふい粒③焼化	カマド構築材
	土師器 壺	40.8×23.2×2.4	完存	胴部外側斜削り。	①砂粒・長石②にふい粒 ③焼化	カマド構築材
	土師器 壺	- × - × 5.8	口縁部欠損 3/4	口縁部短く外反し、胴部外側斜削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にふい粒③焼化	カマド構築材
	須恵器 瓶	- × 21.2 × -	口縁部	長取手の口縁部片。筒形工具で連続刻突 文、波状文を施す。	①砂粒・長石②灰③還元	東側 床面直上
2 身分符跡	須恵器 瓶	- × - × 8.8	体部下半1/2	体部下半から口縁部を欠損。底部外側は削 り調整され、孔はない。	①砂粒・角閃石③還元	東側 床面直上
	土師器 壺	38.0×11.8× -	完存	体部底に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石②黄緑 ③焼化	西南隅 床面直上
	土師器 壺	- × 12.4 × -	1/3	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石②黄緑 ③焼化	埋没土
	土師器 壺	- × 12.0 × -	1/3	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石②にふい粒 ③焼化	埋没土
	土師器 壺	- × 14.4 × -	1/3	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石・長石②橙 ③焼化	埋没土
	土師器 壺	- × 12.0 × -	1/4	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にふい粒③焼化	東側 床面直上
	土師器 壺	27.0×11.8× -	1/5	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石②淡黄③焼 化	埋没土
	土師器 壺	29.0×12.0× -	1/5	体下部に接をもち、体部下半削り。	①砂粒・角閃石②淡黄 ③焼化	埋没土
	鉄製品 鋸	刃部1/2だけで基部を欠損。現存長8.6cm×幅3.5cm×厚さ5.0mm。刃部の曲度は弱い。				
	土師器 壺	- × 20.2 × -	口縁部から肩 部	口縁部短く外反し、胴部外側斜削り。	①砂粒・角閃石・長石・石 英②焼③焼化	南側壁 床面直上
3 身分符跡	土師器 壺	- × - × -	底部から 脚部上半	脚部外側斜削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にふい粒③焼化	埋没土
	土師器 壺	- × - × 4.6	1/2	摸み盛欠損。火井部外側削り調整。	①砂粒・長石②灰③還元	中央 床面直上
	須恵器 壺	35.0×13.6×9.8	1/2	底部削系切り 磨し無調整。 底部下端回転削り調整。	①砂粒・長石②白灰③還元	北壁際 床面直上
	土師器 壺	27.0×14.5×7.3	1/2	体部下半から底部にかけて外側削り。	①砂粒・角閃石②にふい粒 ③焼化	南側 床面直上
	土師器 壺	32.0×13.5× -	1/2	体部下半から底部にかけて外側削り。	①砂粒・角閃石②橙③焼化	埋没土
	土師器 壺	32.0×13.2× -	1/2	口縁部立ち上がりに立ち上がり。体部下半か ら底部外側削り。	①砂粒・角閃石・赤色粘 ②にふい粒③焼化	西南隅 床面直上
	土師器 壺	- × - × -	底部から脚 部上半	脚部外側斜削り。	①砂粒・角閃石 ②にふい粒③焼化	埋没土
	須恵器 壺	- × - × 3.5	2/3	天井部外側削り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰白 ③還元	南側 床面直上
	須恵器 壺	- × - × 3.1	2/3	天井部外側削り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰白 ③還元	南側 床面直上
	須恵器 壺	38.0×18.0×3.4	完存	天井部外側削り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石・石英 ②灰③還元	南側 床面直上
4 身分符跡	須恵器 壺	45.0×14.4×6.3	2/3	左側斜糸切りなし無調整。	①砂粒・長石②灰 ③還元	南側 床面直上
	須恵器 壺	38.0×12.5×6.9	ほぼ完存	回転糸切りなし後、底部外側削り調 整。	①砂粒・長石・黒色粘 ②青灰③還元	埋没土
	須恵器 壺	33.0×13.0×7.0	1/2	左側斜糸切りなし無調整。	①砂粒・長石②灰 ③還元	埋没土
	土師器 壺	- × 14.4 × -	2/3	体部下半から底部にかけて外側削り。	①砂粒・角閃石②橙 ③焼化	埋没土
	土師器 壺	- × 12.6 × -	1/2	底部外側削り。	①砂粒・角閃石②橙 ③焼化	埋没土

表2 遺物観察表(2)

遺 物 名	遺 物 番 号	器 種	器高×口径 ×底径 (cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①土器②色調③焼成	出土位置
4号 住居跡	第11回 10	土器 环	33×12.3×3.2	2/3	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②赤色粒・ にぶい程③焼成	埋没土層 床面直上
	第11回 11	土器 环	33×12.3×3.2	1/2	体部上半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②黄褐色③焼成	東側 床面直上
	第11回 12	石製品 約器車	約器: 宽存。断面は逆台形。上径5.2cm×下径4.3cm×厚さ1.9cm×孔径0.8cm。凝灰岩製で側面を丁寧に削り 後、研磨している。				
	第11回 13	石製品 約器車	約器: 宽存。断面は逆台形。上径5.3cm×下径4.1cm×厚さ2.2cm×孔径0.8cm。凝灰岩製で側面を丁寧に削り 後、研磨している。				
	第11回 14	鉄製品 不詳	現在長6.6cm×幅3.5mm×厚さ3.0mm。断面四角形の棒状のもので打の可能性もある。両端を欠損し、途中で 直角に折れ曲がっている。				埋没土
	第12回 1	土器 环	-×21.4×-	1/2	口縁部が短く緩やかに外反する。側面部外 面削り見崩り。	①砂粒・角閃石・赤色粒 ②にぶい程③焼成	カマド前 床面直上
	第12回 2	粗器 环	-×15.9×-	1/3	天井部外面削り見崩り。	①砂粒・長石②白灰③還元	カマド前 床面直上
	第12回 3	粗器 环	-×14.3×-	1/2	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	南壁際 床面直上
	第12回 4	土器 环	33×13.0×-	2/3	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい程 ③焼成	南壁際 床面直上
	第13回 1	土器 环	-×11.0×-	1/3	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②櫻③焼成	埋没土
	第13回 2	土器 环	-×15.3×-	1/3	体下部に接をもち、体部下半割り。	①砂粒・角閃石②櫻③焼成	埋没土
	第14回 1	土器 环	-×19.7×-	1/3	口縁部緩やかなコ字状に外反し、側面部外 面削り及び斜面見崩り。	①砂粒・角閃石 ②長石・にぶい程③焼成	埋没土
	第14回 2	土器 环	-×18.6×-	1/4	口縁部緩やかなコ字状に外反し、側面部外 面削り及び斜面見崩り。	①砂粒・角閃石・其石 ②にぶい程③焼成	カマド前 床面直上
	第14回 3	粗器 环	26×13.4×2.6	完存	天井部外面削り見崩り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第14回 4	粗器 环	-×17.9×-	1/3	端部短く強く屈曲。	①砂粒・長石②灰③還元	東壁際 床面直上
	第14回 5	粗器 环	-×20.1×-	1/4	端部短く強く屈曲。天井部外面に判読不詳 な墨書き。	①砂粒・長石②灰③還元	西側 床面直上
	第14回 6	粗器 环	26×13.4×2.6	1/2	回転糸切り離し後、底部周縁回転糸 割り調整。	①砂粒・長石・黒石粒 ②白灰③還元	東側 窓蹴穴
	第14回 7	土器 环	33×12.5×8.0	ほぼ完存。	底部外面削り見。	①砂粒・角閃石②にぶい程 ③焼成	南東隅 窓蹴穴
	第14回 8	土器 环	29×12.0×-	1/3	底部外面削り見。	①砂粒・角閃石②櫻③焼成	埋没土
5号 住居跡	第16回 1	粗器 环	-×13.0×-	1/3	端部短く強く屈曲。	①砂粒・長石②白灰③還元	埋没土
	第16回 2	粗器 环	-×-×4.2	1/3	天井部外面削り見崩り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16回 3	粗器 环	-×-×3.9	1/3	天井部外面削り見崩り調整後、扁平な構み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	東壁際 床面直上
	第16回 4	粗器 环	33×12.5×8.0	ほぼ完存。	回転糸切り離し後、底部回転糸割り調整。	①砂粒・長石・石英②白灰 ③還元	南東隅 窓蹴穴
	第16回 5	規器 环	49×12.4×8.0	3/4	右回転糸切り離し後、高台貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16回 6	規器 环	-×13.2×-	3/4	底部回転糸割り調整。	① ②7.5Y6/1灰③還元	埋没土
	第16回 7	規器 环	3.8×13.3×8.0	1/2	右回転糸切り離し後、底部周縁回転糸割 り調整。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16回 8	規器 环	-×-×9.5	1/2	回転糸切り離し後、高台貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16回 9	土器 环	29×12.2×-	1/2	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・長石・角閃石②櫻 ③焼成	南側 床面直上
	第16回 10	土器 环	28×12.5×5.0	3/4	底部外面削り見。底部内面に判読不詳の線 刻あり。	①砂粒・長石・角閃石 ②にぶい程③焼成	埋没土
6号 住居跡	第16回 11	土器 环	33×12.1×-	3/4	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい程 ③焼成	埋没土
	第16回 12	規器 环	43×12.0×6.6	ほぼ完存。	回転糸切り離し後、手持ち見崩り調整。	①砂粒・長石②白灰③還元	西側 床面直上
	第17回 13	土器 环	31×12.3×-	ほぼ完存。	底部外面削り見。	①砂粒・角閃石②にぶい程 ③焼成	南東隅 窓蹴穴
	第17回 14	土器 环	27×14.0×-	1/2	底部外面削り見。	①砂粒・角閃石②櫻③焼成	埋没土
	第17回 15	土器 环	-×-×9.9	1/3	体部下半から底部にかけて外表面削り。	①砂粒・角閃石②赤色粒 ②にぶい程③焼成	埋没土
	第17回 16	鉄製品 錘	ほぼ完存。刃部は研ぎ減っている。現存長16.1cm×幅4.0cm×厚さ5.0mm。 基礎部の折り返しはコの字状で、刃部の曲面は弱い。				南側 床面直上

表3 遺物觀察表(3)

遺 機	遺 物 番 号	器 種	器高×口径 ×底径 (cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①鉢②色調③焼成	出土位置
8号 住居跡	第17回 17	鉄製品 鎌先	片側1/2。現存長13.6cm×幅3.2cm×厚さ4.0mm。 前に突き出る部分は鋸びが大きく明確にすることはできなかった。				カマド前 床面下
	第17回 18	鉄製品 刀子	両端を欠損。両はない。現存長3.0cm(身部12cm×茎部1.8cm)×幅3.3mm×厚さ5.0mm。				埋没土
	第17回 19	鉄製品 不詳	現存長6.5cm×幅5.0mm×厚さ5.0mm。断面四角形の棒状のもので釘の可能性もある。両端を欠損。				埋没土
	第18回 1	土師器 甕	- × 18.6 × -	1/2	口縁部コの字状に外反し、胴部外横位及び斜位削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②赤褐色化	東側 床面直上
	第18回 2	土師器 甕	- × 19.7 × -	1/4	口縁部コの字状に外反し、胴部外横位及び斜位削り。	①砂粒・長石・石英・片岩 ②褐化	埋没土
	第18回 3	須恵器 蓋	3.8 × 16.1 × 3.5	ほぼ完存	天井部外側回転削り後、構み貼りつけ。	①砂粒・角閃石・長石 ②灰白③還元	埋没土
	第18回 4	灰陶陶器 环	4.7 × 17.0 × 8.0	1/2	施釉部は厚減したためか凹凸感としない。	①鐵質②灰③還元	カマド前 床面直上
	第18回 5	土師器 环	3.3 × 12.0 × -	2/3	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第18回 6	土師器 环	3.6 × 12.6 × -	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②明褐色 ③焼化	南側 床面直上
	第18回 7	土師器 环	2.5 × 12.5 × 8.0	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第18回 8	土師器 环	2.8 × 12.1 × 8.2	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	南側 床面直上
	第18回 9	土師器 环	3.4 × 14.0 × 10.0	1/5	体部下半から底部にかけて外面削り。内面は放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②褐③焼化	埋没土
	第19回 1	土師器 甕	- × 22.0 × -	1/4	口縁部コの字状に外反し、胴部外横位削り。	①砂粒・角閃石・長石・雲母・石英②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第19回 2	土師器 甕	26.8 × 20.8 × 4.2	3/4	口縁部コの字状に強く外反し、胴部外横位及び斜位削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい穂③焼化	西側 床面直上
	第19回 3	土師器 台付甕	- × 14.0 × -	1/2	口縁部コの字状に外反し、胴部外横位及び斜位削り。	①砂粒・角閃石②褐③焼化	中央 床面直上
	第19回 4	土師器 台付甕	- × - × -	1/2	胴部外横位及び斜位削り。	①砂粒・角閃石②褐③焼化	埋没土
	第19回 5	須恵器 蓋	- × - × 3.4	細片	天井部外側回転削り後、構み貼りつけ。	①砂粒②灰③還元	埋没土
	第20回 6	須恵器 蓋	- × - × 3.2	細片	天井部外側回転削り後、構み貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第20回 7	須恵器 鉢	7.0 × 17.8 × 8.0	1/2	回転切り離し後、底部回転削り調整。	①砂粒②青灰③還元	中央 床面直上
	第20回 8	須恵器 鉢	5.9 × 15.4 × 8.2	2/3	右縁板のみ離し後、高台貼りつけ。	①砂粒・角閃石・長石・石英②灰白③還元	埋没土
	第20回 9	土師器 环	3.5 × 13.6 × 7.0	1/5	底部外側回転削り調整。内面は丁寧な黒色処理箇所。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第20回 10	土師器 环	4.2 × 14.0 × 10.0	3/4	体部下半から底部にかけて外面削り。内面は放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②明褐色 ③焼化	埋没土
	第20回 11	土師器 环	4.6 × 12.1 × -	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	北西側 床面直上
	第20回 12	土師器 环	2.8 × 12.4 × -	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②明褐色 ③焼化	埋没土
	第20回 13	土師器 环	3.4 × 12.3 × -	3/4	底部外面削り。底部外間に「田」とみられる墨痕。	①砂粒・角閃石②褐③焼化	南側 床面直上
	第20回 14	土師器 环	3.6 × 12.0 × -	1/2	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	カマド前 床面直上
	第20回 15	土師器 环	3.3 × 11.8 × -	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	西側 床面直上
	第20回 16	土師器 环	3.2 × 11.8 × -	3/4	底部外面削り。	①砂粒・角閃石②褐③焼化	埋没土
	第20回 17	土師器 环	- × 12.1 × -	細片	底部外面削り。内面は放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第20回 18	土師器 环	- × 12.4 × -	底部のみ	底部外面削り調整。底部外間に判読不能な「田」の墨書きあり。	①砂粒・角閃石②赤褐 ③焼化	埋没土
	第20回 19	土師器 环	2.6 × 12.1 × -	2/3	体下部から底部にかけて外面削り調整。底部外間に「又」の墨書きあり。	①砂粒・角閃石②明褐色 ③焼化	埋没土
	第21回 20	土師器 环	- × - × -	底部のみ	体下部から底部にかけて外面削り調整。底部外間に「又」の墨書きあり。	①砂粒・角閃石②にぶい穂 ③焼化	埋没土
	第21回 21	瓦 瓦瓦	厚さ2.6cm	1/4	一枚造り、刻印文字瓦「寺」(正面)凸面 側が菱形。側部2層、端部3層面取り	①片岩・砂粒②灰③還元 (二次焼成)	カマド内
	第21回 22	石製品 砾石	現存長5.2cm×幅3.1cm×厚さ3.5cm。				埋没土
	第21回 23	鉄製品 網	完存。断面は長方形で先端は盤状に緩やかにすぼまる。長さ50cm×幅1.2cm×厚さ2.5mm。				埋没土
	第21回 24	鉄製品 刃	皿部を欠損し、先端が折曲がっている。断面は四角形。現存長58cm×幅9.0mm×厚さ4.0mm。				埋没土

表4 遺物観察表(4)

遺 物 名	遺 物 番 号	器 種	器高×口径 ×底径(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
10住 号居	第21回 25	鉢製品 釘	定存。長さ6.1cm×幅9.0cm×厚さ6.0mm。				埋没土
11号 住居跡	第22回 1	土師器 壺	- × 9.1 × -	1/6	口縁部短く外反。胴部上半横位窓削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②赤褐色③焼化	カマド前 堆満土
	第22回 3	土師器 壺	3.8 × 12.8 × -	ほぼ定存。	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②赤褐色	中央 埋没土
	第22回 4	須恵器 壺	3.1 × 14.0 × -	1/3	底部回転糸切り難し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	西側 埋没土
	第22回 5	須恵器 壺	3.5 × 12.3 × -	1/3	底部回転糸切り難し無調整。	①砂粒・長石②青灰③還元	東側 床面上直上
	第22回 6	土師器 壺	3.5 × 12.3 × -	1/5	底部外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②灰白 ③焼化	埋没土
	第23回 1	土師器 壺	- × 11.2 × -	1/6	口縁部外反し、胴部窓削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②赤褐色③焼化	埋没土
12号 住居跡	第23回 2	土師器 壺	3.5 × 12.2 × -	ほぼ定存。	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	埋没土
	第23回 3	土師器 壺	2.9 × 12.4 × -	1/5	底部外面窓削り調整。	①砂粒・赤色土粒②焼 ③焼化	埋没土
	第24回 1	土師器 壺	- × 21.5 × -	1/4	口唇部構み上げ、胴部上半斜位窓削り。	①砂粒・長石・角閃石②陶 ③焼化	中央 床面上直上
13号 住居跡	第24回 2	須恵器 壺	- × × 9.0	1/5	高台厚く、胴部下半回転窓削り。	①砂粒・長石②青灰③還元	中央 床面上直上
	第24回 3	須恵器 壺	- × × 5.3	1/3	天井部回転糸切り調整後、扁平な構みを貼りつけ。	①砂粒・長石②灰白③還元	埋没土
	第24回 4	須恵器 壺	3.8 × 13.4 × -	1/3	底部回転糸切り難し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	埋没土
	第24回 5	須恵器 壺	3.6 × 14.0 × -	3/4	底部回転糸切り難し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	南側 床面上直上
	第24回 6	須恵器 壺	4.1 × 20.0 × 17.1	1/2	器肉厚い。	①砂粒・長石・石英 ②灰白・淡黄③還元	南壁 床面上直上
14住 号居	第24回 7	土師器 壺	4.5 × 13.9 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・長石・角閃石 ②にい程③焼化	西壁 床面上直上
	第24回 8	土師器 壺	3.1 × 12.1 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②焼化	中央 床面上直上
	第22回 2	土師器 壺	- × 17.2 × -	1/5	口縁部の字状に外反。 胴部上半横位窓削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②にい程③焼化	北側 埋没土
15 施 立 付 建 物	第25回 1	土師器 合付壺	- × - × -	細片	胴部窓削り。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	P 3 埋土
	第25回 2	須恵器 壺	- × 16.1 × -	細片	端部窓く屈曲。	①砂粒・長石②灰③還元	P 6 埋土
	第25回 3	須恵器 壺	3.3 × 13.1 × 9.3	1/3	回転糸切り難し後、底部周縁回転窓削り調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	P 7 埋土
23住 号居	第27回 23±1	土師器 壺	30 × 11.8 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	埋没土
26住 号居	第27回 26±1	土師器 壺	3.5 × 12.3 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②明闇 ③焼化	北側 床面上直上
	第27回 25±2	土師器 壺	3.3 × 12.7 × -	1/2	体下部から底部にかけて外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	埋没土
墓 葬	第28回 1井±1	軟質陶器 鉢	底部のみ 1/6	体下部外面窓削り調整。	①砂粒・角閃石②にい程 ③還元	西側 7層中	
	第30回 1	繩文 深鉢	胴部片	曲輪の平行沈線内に柄突文を施す。称名寺 「式」に比定。	①砂粒・角閃石・長石 ②赤褐色③焼化	D - 8 グリッド	
	第30回 2	繩文 深鉢	口縁部片	波紋状の縁で、單孔又し横文地に平行沈線を 横位に施す。諸機も式に比定。	①砂粒・角閃石・雲母 ②明闇③焼化	C - 6 グリッド	
	第30回 3	繩文 深鉢	胴部片	帶狀のR L 沈線と無文帶す沈線で区画す る文様構成。称名寺「式」に比定。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	8号住居 埋没土	
	第30回 4	繩文 深鉢	胴部片	L R 沈線を地文とし、平行沈線を垂下させ る。称名寺「式」に比定。	①砂粒・角閃石・長石 ②にい程③焼化	3号住居 埋没土	
	第30回 5	繩文 深鉢	胴部片	無文帶に平行沈線を施す。 称名寺「式」に比定。	①砂粒・角閃石②にい程 ③焼化	13号住居 埋没土	
	第30回 6	繩文 壺	胴部片	細かい平行沈線と過巻状の文様を構成する 称名寺「式」に特徴的なものである。	①砂粒・角閃石②暗褐色 ③焼化	10号住居 埋没土	
	第30回 7	打製石斧	現存長8.1cm×幅6.0cm×厚さ2.2cm。黒色岩質。鋭形で刃部を欠損する。			C - 6 グリッド	
	第30回 8	打製石斧	長さ13.5cm×幅8.2cm×厚さ2.3cm。頁岩質。菱形で刃部の一部を欠損する。			8号住居 埋没土	
	第30回 9	打製石斧	長さ12.8cm×幅5.6cm×厚さ2.0cm。黒色岩質。菱形で定存する。			3号住居 埋没土	
	第30回 10	打製石斧	長さ9.2cm×幅9.1cm×厚さ2.3cm。黒色岩質。菱形で基部の一部を欠損する。			2号住居 埋没土	

表4-2 採集遺物

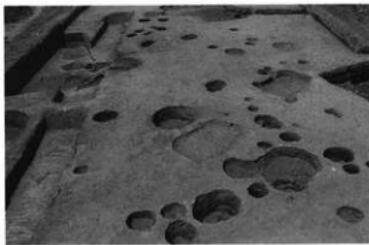
写 真 図 版



1. 遺跡全景（上方から望む）



2. 遺跡北側近景（南から望む）



3. 遺跡北側土坑群（南から望む）



4. 標準堆積土層断面（調査区南西側）



5. 噴砂痕跡（13号住居跡覆土跡）

図版
2
遺跡写真



1. 1号居住跡遺物出土全景（西から望む）



2. 1号居住跡カマド煙道部断面



3. 2号居住跡遺物出土全景（西から望む）



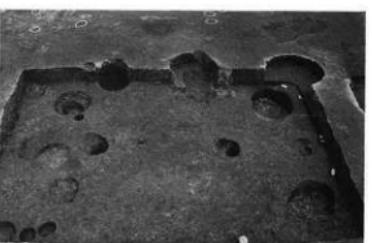
4. 2号居住跡カマドB（南から望む）



5. 2号居住跡カマドA（西から望む）



6. 2号居住跡床面下掘り方（西から望む）



7. 3号居住跡遺物出土全景（西から望む）



8. 3号居住跡カマド（西から望む）

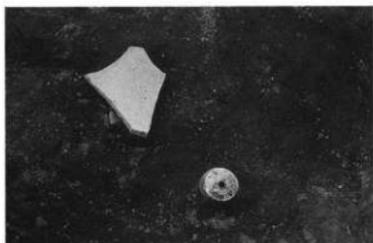
図版3
遺構写真



1. 4号住居跡全景（西から望む）



2. 4号住居跡カマド断面（南から望む）



3. 4号住居跡遺物（12）出土近景



4. 5号住居跡遺物出土全景（東から望む）



5. 6号住居跡全景（西から望む）



6. 6号住居跡カマド近景（西から望む）



7. 6号住居跡土層断面（北から望む）



8. 6号住居跡掘り方全景（西から望む）

図版 4
遺構写真



1. 7号住居跡遺物出土全景（東から望む）



2. 7号住居跡掘り方全景（西から望む）



3. 8号住居跡遺物出土全景（西から望む）



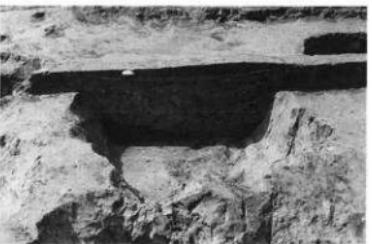
4. 8号住居跡掘り方内遺物（17）出土近景（北から望む）



5. 8号住居跡掘り方全景（西から望む）



6. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から望む）



7. 8号住居跡床下土坑



8. 9号住居跡遺物出土全景（西から望む）

図版 5
遺構写真



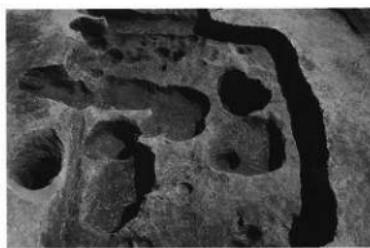
1. 9号住居跡掘り方全景（西から望む）



2. 10号住居跡遺物出土全景（南から望む）



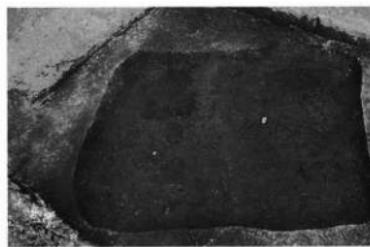
3. 10号住居跡遺物出土近景



4. 10号住居跡掘り方全景（北から望む）



5. 11号住居跡遺物出土全景（西から望む）



6. 12号住居跡遺物出土全景（西から望む）



7. 13号住居跡遺物出土全景（西から望む）



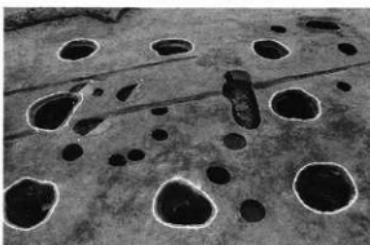
8. 11・14号住居跡遺物出土全景（西から望む）

図版
6

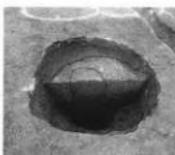
遺構写真



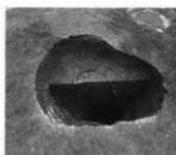
1. 1号掘立柱建物跡柱痕確認全景（東から望む）



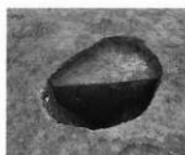
2. 1号掘立柱建物跡完掘全景（北から望む）



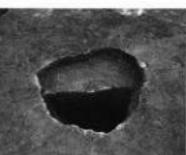
3. 柱穴（P-1）断面



4. 柱穴（P-2）断面



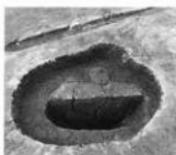
5. 柱穴（P-3）断面



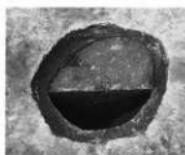
6. 柱穴（P-4）断面



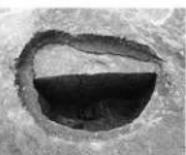
7. 柱穴（P-5）断面



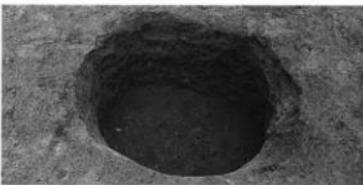
8. 柱穴（P-6）断面



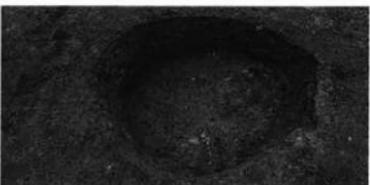
9. 柱穴（P-7）断面



10. 柱穴（P-8）断面



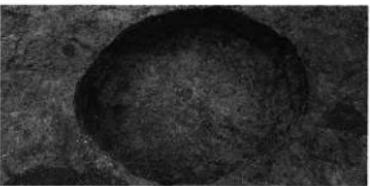
11. 5号土坑全景（南から望む）



12. 7号土坑全景（東から望む）



13. 9号土坑全景（東から望む）



14. 11号土坑全景（西から望む）

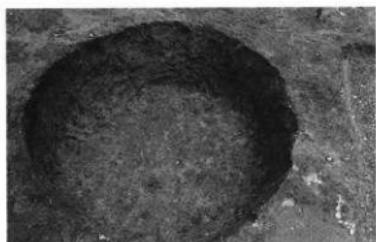
図版7 遺構写真



1. 12号土坑全景（南から望む）



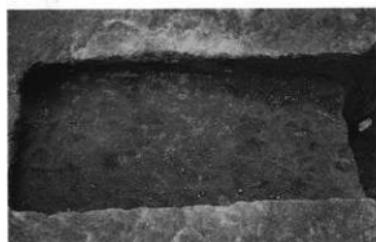
2. 13号土坑全景（南から望む）



3. 16号土坑全景（南から望む）



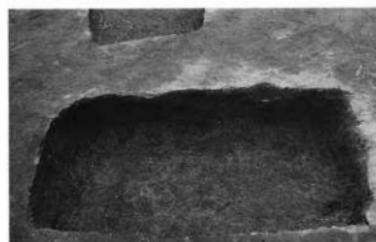
4. 17号土坑全景（南東から望む）



5. 21号土坑全景（東から望む）



6. 22号土坑全景（南から望む）



7. 24号土坑全景（東から望む）



8. 26号土坑遺物出土全景（南から望む）

図版 8
遺構写真



1. 28号土坑全景（西から望む）



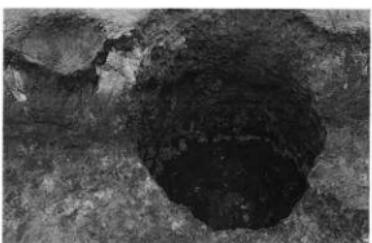
2. 29号土坑全景（北から望む）



3. 1号井戸遺物出土（北東から望む）



4. 2号井戸掘削断面（西から望む）



5. 2号井戸全景（西から望む）



6. 道路跡（西から望む）



7. 1号溝全景（西から望む）



8. 2号溝全景（西から望む）



1



2



3

1号住居跡出土遺物



1



2



3



5



6



4



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

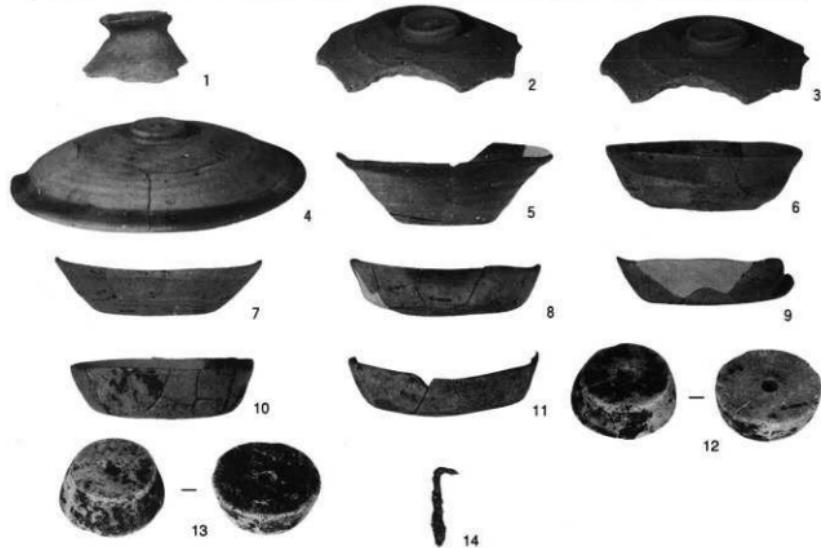
2号住居跡出土遺物

図版
10

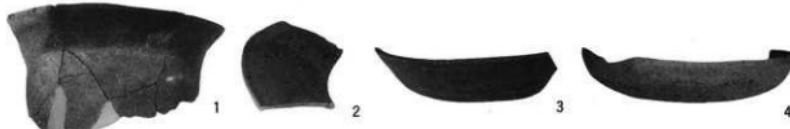
遺物写真



3号住居跡出土遺物



4号住居跡出土遺物



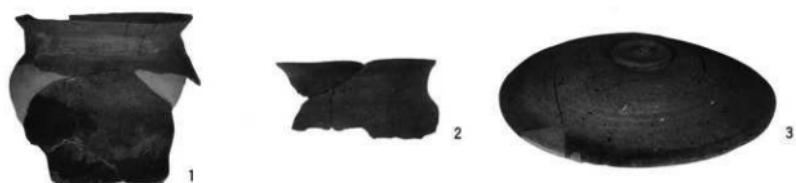
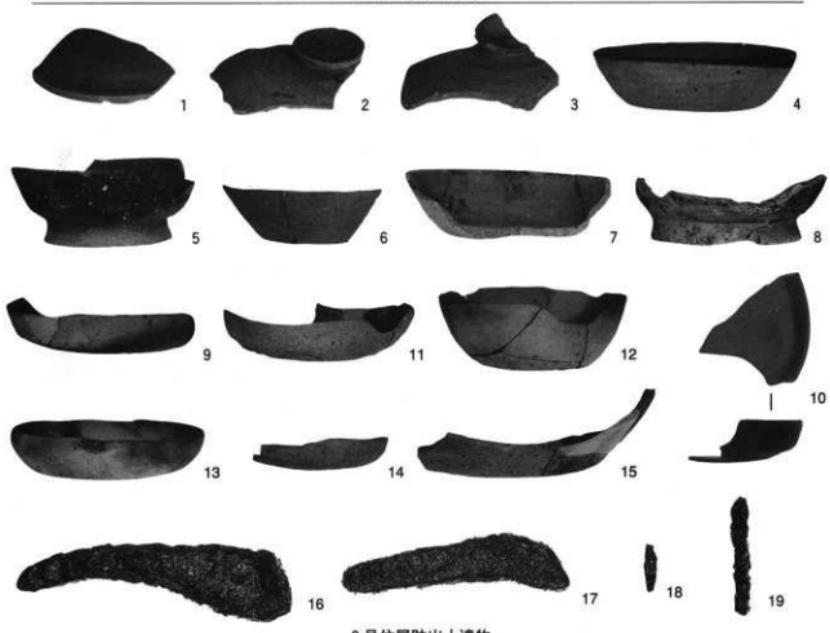
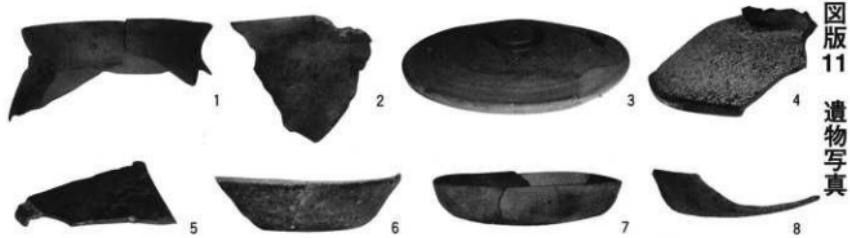
5号住居跡出土遺物



6号住居跡出土遺物

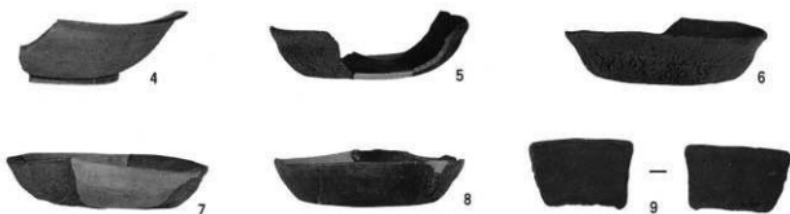
図版
11

遺物写真

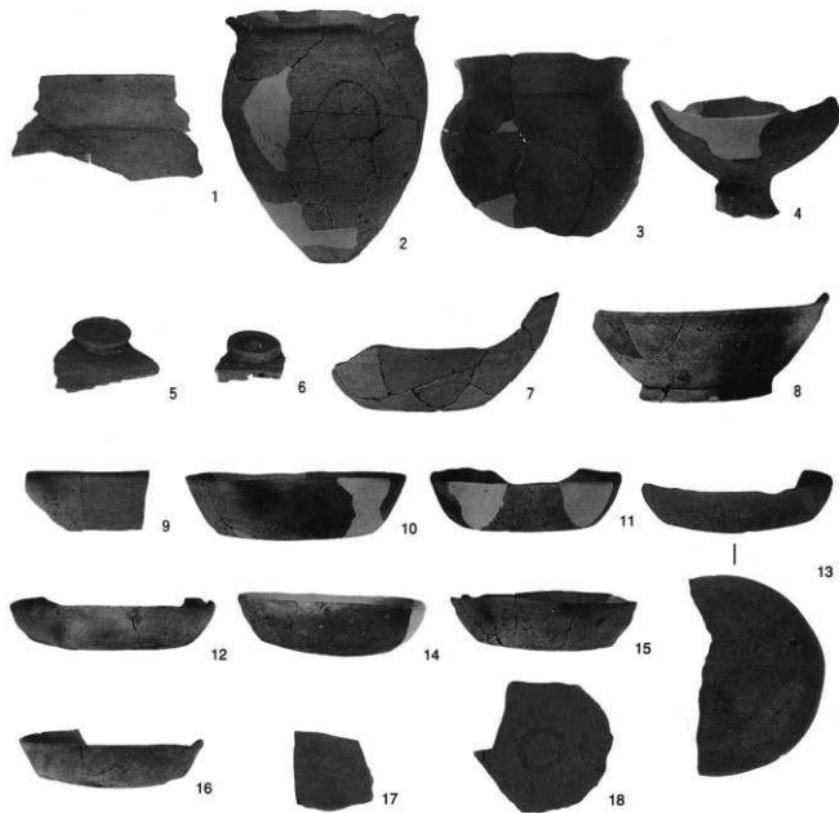


図版 12

遺物写真

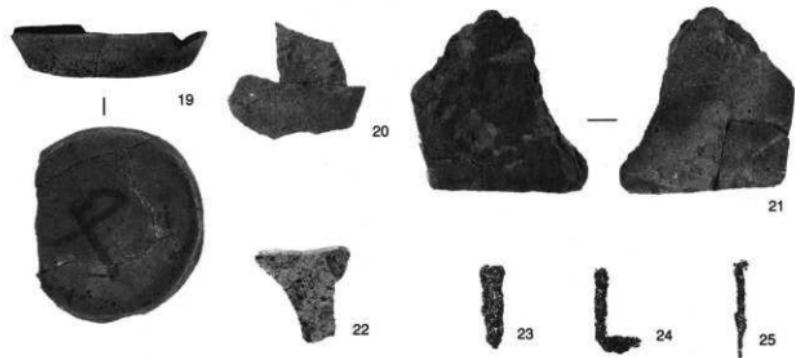


9号住居跡出土遺物

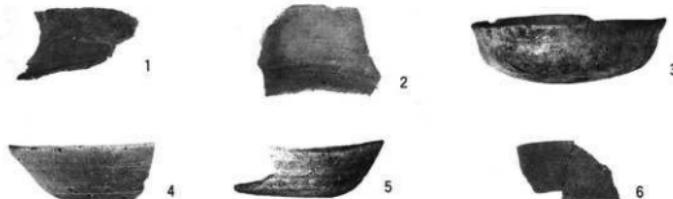


10号住居跡出土遺物

図版 13
遺物写真



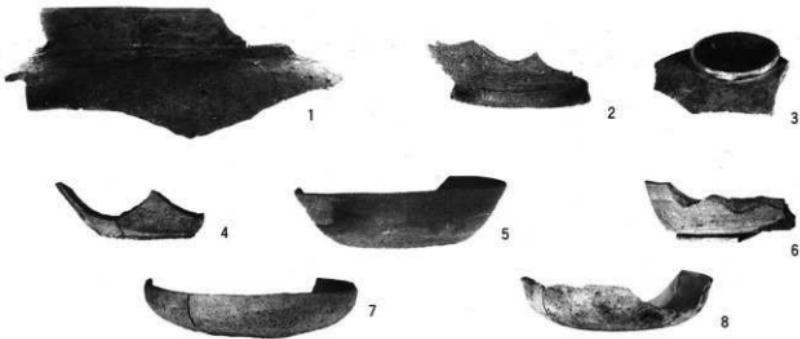
10号住居跡出土遺物



11・14号住居跡出土遺物



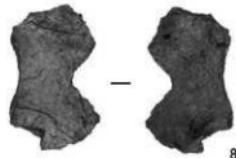
12号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物

図版
14

遺物写真



表土採集遺物

抄 錄

フリガナ	ミヤタイセキ ハックツチョウサホウクシヨ
書名	宮田遺跡 発掘調査報告書
副書名	
編著者名	齊藤和之（群馬県教育委員会文化財保護課）・武部喜充（山武考古学研究所）
編集機関	山武考古学研究所／〒286 千葉県成田市並木町221 ☎0476(24)0536代
発行機関	宮田遺跡調査会／〒371 群馬県前橋市大手町1丁目1番地1号 群馬県教育委員会文化財保護課内
発行年月日	西暦1996年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮田	群馬県前橋市 富田町587-1他	10201	6E33	36°19'20"	139°1'36"	19950417 19950531	1,260m ²	道路清掃 車両車庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮田	集落跡	平安時代	堅穴住居跡14軒・掘立柱建物跡1棟・土坑29基・井戸跡2基	総出土量は大型整理箱17箱分、平安時代の土師器壺・甕、須恵器壺・甕・鉢	818年大地震による液状化現象(埴砂痕)

宮田遺跡

印 刷 平成8年3月20日

発 行 平成8年3月25日

編集 山武考古学研究所

千葉県成田市並木町221

☎0476(24)0536

発行 宮田遺跡調査会(事務局)

群馬県教育委員会文化財保護課内

☎027(223)1111 内線4063

印刷 株式会社 文化総合企画

☎0476(93)0593



